攝津名所圖會

嶌下郡
嶌上郡　五

貴重書
291.6309
Ak
6

0437

攝津名所圖會

嶌下郡
嶌上郡　五

貴重書
291.6309
Ak
6

攝津名所圖會卷之五

嶋下郡

勝尾寺
輪瓢
弥勒銅像
不動の石
光明塔
荒神祠
紙本
佐井寺
五重塔
行基松
講堂
荒神社
影向石
西方弥陀第
鐘樓
木陰菴
白檀木
如法堂
胸加井
大黒石
八幡宮節塔
大石
愛宕木
一橋門
一乾坤
楼門
瓢堂
蓮角池
圓塚
大池
吹田渡口
護國寺
横池
虎宮火
三所祠
吹田祠
禪福寺
般若臺
三所權現
二階堂
遠林坊
光明院御塔
佐井のほり水
外院帝釋寺
頼朝塔
梶遠
聖天の祠
如塔
京の塔
賀院牟
九間蹟
法教信塔
龍谷神兜院
終谷塔
二尊院
文殊堂
釋迦堂
護摩堂
禪石
御影堂
角山堂
皇子石塔
紐引家
吉志部祠
幡前寺
幡家
高濱
圓滿寺
伊射奈岐神社
明神水
改臨松
行山帝釋寺
名次祠
味舌祠
觀音寺
泪池

武庫川女子大学図書館
昭和 年 月 日
291639
A18
117092

荒井日記

板木師伊沢文次郎

二魂坊火　香飼御牧
野宮　水江
郡祠　宿河原
馬塚　茶臼冢
白井蛍見　牟禮神社
宮北塚　佐保山
國見山　鳥居峠
大門寺　大冢
御手座冢　安威川
太田神社　太田古城
女九祠　溝橛神社
東本願寺懸所　梅林寺
黒井清水　子石松

藤杜祠　高瀬里
佐賀良義神社　井於神社
須久久神社　山井清水
柳木冢　道祖神
大冢　海北塚
高山　泉原山
忍頂寺山　忍頂寺
幣久良神社　幣杜
阿爲神社　大織冠荒墳
雲見阪　繩體之皇陵
茨城　茨木川
天石門別神社　茨木祠
新屋神社　便水

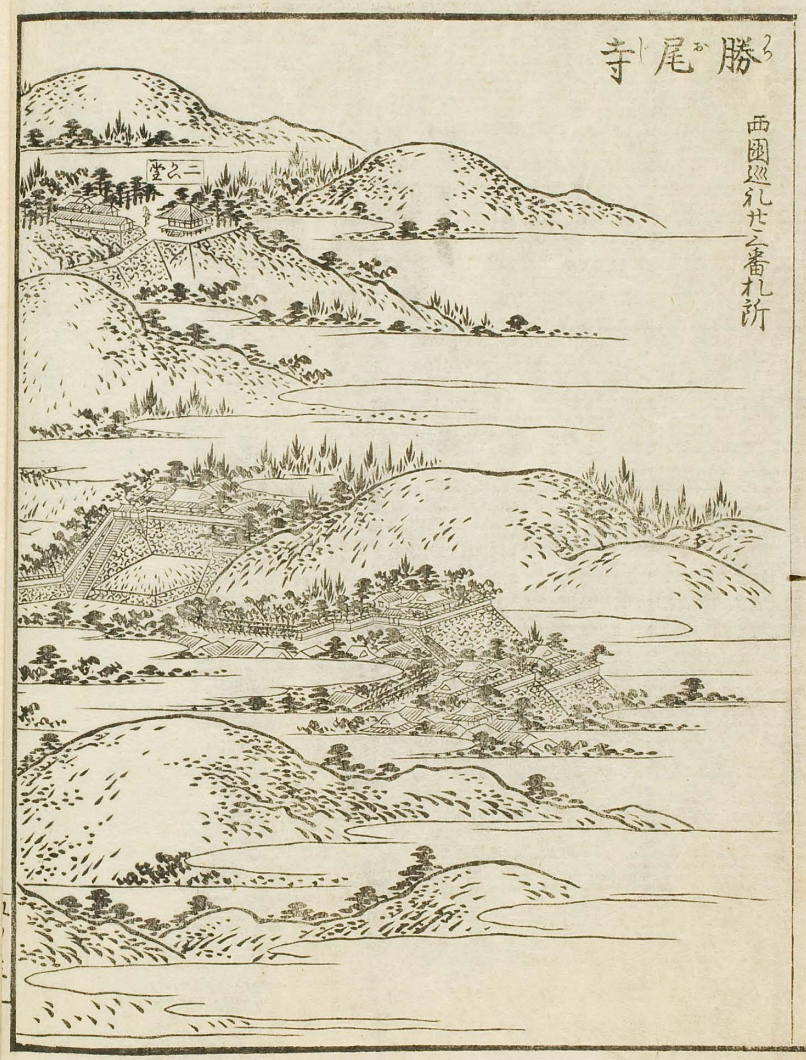
嶋上郡

冨田　三輪祠　普門寺
慶瑞寺　碑銘　天神祠　清水
蓮如腰懸石　二島鴨神社　庁茅茅芦
三島江浦　玉江
鴨祠　津江藥師　玉川
安國寺塚　帯仕山　氷室古蹟
今城冢　靈山寺　石標清人書　一本木冢
安岡寺　般若塔　服部古城　神服神社
苏川　阿久刀神社　安正寺
廣智寺　上宮天神　苏川古城
伊勢寺　伊勢墳　能因墳　碑銘　檀神木
花之井

井保櫻　惣持寺　式観寺　姫冢　奥院　政朝卿廟　茶師堂　古鐘銘
本照寺　冨壽栄松
教行寺　三島江
松永久秀故居
八十冢　阿武山
名産服部煙艸
笠森稲荷祠
靈松寺
谷山塚松
高槻城

野見神社　大塚殿　礒嶌　冠柳
稻殿蘆　春日祠　都加毋止冢　足跡冢
上牧祠　上御牧　中御牧　二牧橋
檜尾川　鏡井　妙法冢　小井
大澤山　旗立嶺　原山　原池
萩谷祠　布山寺
神峰山寺　光仁天皇塔　二王石　九頭龍　観音堂　明王嶽　役遷窟　恵日港　不動堂　虎石　天狗岩　笈掛石
盤手杜　盤手故宮　盤手里
金龍寺　六角堂　鼈巖　経塚　地図櫻　紫雲塔　地図係　天王祠　沈之坊旧址
僧屋敷　神南備社　碑銘
侍宵小侍従墳
阪口八幡　水垂瀬山　櫻井里　櫻井宿　櫻井　水垂瀬瀧　楠正成正行小楽棹を送所　安備祠　井口井　麻茅原
水垂瀬渡口　水垂瀬里　水無瀬殿　水垂瀬川　渡多羽院御廟

阿弥陀院　廣瀬祠　大山嵜　西観音寺
焔魔堂　閑明神　閑戸院旧蹟　山崎驛
城攝國境


勝尾寺
西國巡礼廿三番札所
二ノ堂

八大石
四方有
大師堂
三社
本堂
廣堂
中山乃
三王門

島下郡 東ハ島上郡ニ接シテ至テ西ハ豊嶋能勢二郡ノ界ニ至テ南ハ西成郡及ビ和泉式部集 河内ノ茨田郡ノ界ニ至テ北ハ丹州 来田郡ノ界ニ至ル

ツネ風のはてと家のあるかぎりのしもうち舟ぞるかり 和泉式部

三代實録云貞観四年三月十四日摂津国嶋下郡任吉郡古荒田三十五町九段奉充中宮職云云

應頂山勝尾寺菩提院 勝尾ハ高嶺ニアリ 舊名弥勒寺 古義真言宗 坊舍廿三坊 移隔群峯ニ豊嶋郡ニ入レリ 謬アリ

茅の戸にあけそれかるる白雲にいかむとしるの矢とつるをさん 法然上人

法然上人土佐国より帰洛の時はるくに居しかの舊蹟なり 法然上人自画賛當山にあり圓光大師舊蹟 芝五重塔 當寺の本尊 都擅香木にして必観音像 化人と

講堂十一面観世音 倶ニ作リ中ノ西国巡礼第廿三番

如法堂薬師如来 開成皇子一刀三礼して彫刻の遺愛なり 皇子遷化の時此尊像 摘佛度ハ侵レ世ニ法華経ト称シ元亨釈書ニ見ヘタリ

般若臺 奥院ハ角堂ト称シ開成皇子書寫ノ所アリ

文殊堂 奥院ニアリ開成皇子彫刻ノ文殊菩薩ハ安置ス

釋迦堂 東谷ニアリ釋尊大日如来ト安置ス二尊倶ニ開成皇子の所造

開山堂 當山の鼻祖若仲法等の二師 開成皇子 行巡上人等の肖像ハ安置ス

三寶荒神社 講堂の西ニアリ荒神祠の中ニアリ百姓国ヲ護る 日本紀初出現 白檀木 香氣今ニ四方ニ薫ス

鎮守二所權現 孫堂の西ふあり 淑方 八幡 藏王ゑ系ふ

坂子祠 荒神の後ふあり

護摩堂 五大尊ゑ安に 弘法大師の作

御影堂 弘法大師の像ゑ安に

輪藏 如法堂の東ふあり 續日本紀曰景雲の年八幡宮の告ふよりて大長寺ふ藏む 年中に至り大宰府ふ仰せて一切經ゑ写さ彌勒寺ふ藏む

影向石 本堂のふふあり 角城皇子般若經ゑ書写しゆ八幡宮ふ石上に 本堂向ふ 絲金水をあくゆ皇子ふ 云ふ八幡宮 偈文ゑ以て答ゆ 次下ふ見へ

淑方祠 本堂の東ふあり

閼伽井 淑方祠の下ふあり 僧生ふ

二階堂 當山の上方ふあり 本尊阿弥陀佛 恵心僧都の作 厨子の壁板ふ 若導大師像 法然上人像あり 布薩戒ゑ授けゆ 所ふ又 聖天尊祠 本堂の西ふあり 以室僧正の 證如上人祠を安

角成皇子石塔婆 坐禪石の上ふあり 皇子 坐禪石の

坐禪石 山頂ふあり 皇子 坐禪ゆ所ふ

弥勒銅像 長丈六 奥院ふあり 上ふ堂舍あり 希代の大像ゆ 藏ようも 所ふ

西方松 奥院ふあり 皇子般若經ゑ埋ゆ

大黒石 坐禪石の東ふあり 石の形をして名ふ

遠林房 日所ふあり 奥州松島瑞岩寺の雲居禪師の 鷲跡ゆ

證如上人塔 山峰ふあり 紀の浦まで眺ふ遊ゆ 所ふ 浪花及び西の方 淀の浦々和泉 通ふ 日所ふ 橋ゆ 加古の人ゆ 堅固の大德あり

加古教信塔

瀧谷神呪院 以室上人の旧蹟ゑ 瀧谷ふあり 高サ三丈許 不動石 形を 三密堂の額白狐の筆 日所ふ 釋氏祖師大德 阿弥陀座鋪 日所ふ 祖師火定石塔 日所ふ 火中の定ふ入ゆ所ふ 頼朝塔 梶原塔 梶原平三景時ふ命じ諸堂再興ゆ寄附ゆ 倶ふ護摩堂の西ふあり 奉永無尤の浸源 公 今ふあり 梶原平三景時ふ命じ諸堂再興ゆ寄附ゆ 其功德を 法華供養塔 日所ふ

熊谷塔 奥院ふ 阿部丹波守光明塔 愛染堂の あふあり

光明院御塔 東谷ふあり 後伏見院第四の皇子 葬豊仁建武三年 八月十五日 踐祚十二月廿八日 昇位康暦二年六月 廿四日 崩ゆ 遺勅ふ 當山ふ藏る所ゑ 元祿巳卯ノ歳 公命ふ 新ふ墻を造ゆ 帝王正統錄ゑ光明帝康暦 二年六月廿四日 勝尾寺の庵ふ於く崩ゆ 聖壽六十 日本光明院と号ゆ 遺勅 益ふ及ぶ 八大石像 角成皇子の建ふ所ゑ五大尊 四天王ゑ勸請ゆ

鐘樓 鐘ふ中 寿宋國 化元年手 百濟の國王の后妃と献ゆ 所ゑ 金鐘あり 元亨釋書ふ出 名鐘と云ふ 元寇の兵火ふ滅ひしゆ 宜ふ 鐘ゑ 横ゆ 新ふ鑄ふ 鐘も亦元和二年五月十四日に滅び 鑄ふ 鐘ふ 元保年中ふ及んで 亀ゆ 折鐘ゑ鑄ふ 幸壽丸旧蹟 知足院ふあり 今画新あり 蹟の古ゆ

二尊院 知足院の東ふあり 本尊阿弥陀佛 恵心僧都と安阿弥と一軀兩作ゑ安ふ背 競の如ごとし

祓荒神祠 茶坂ふ　本含庵 二階堂の愛染木 瓶花木 倶ふ行堂の左右ふあり

樓門 金剛力士の額應頂山 勅額

一衡門 二驅ふ安に 勝尾山 ゝう三十六町 禁 栗生 新家村 路傍ふあり 勝尾寺 勅額

それ當山の開基若伸若等ハ攝州の刺史菅原致房の雙兒ゝ母ハ源氏紀州の刺史懐位の第八の女ゝ慶雲四年正月十五日の秋菅に蓮華二莖空ゝり飛来て口ふ入と見ゝ若覺ぬ妊身ふしゝく終ふ和銅元年正月十五日平具ふ出誕に母病苦わしゝ而室内ゝ異香あり一胞の中ふ二兒相對に啼哭せに者ふ笑を含ミ孩雅聰慧ふ生ゝく群孺ふ超ゝり九茶ふして天王寺の禁港を師ゝし十七ふして剃髮し菩薩戒を受南ゝく冠歳ふしゝく學内外ふ通に咸曰鳳智の開發をとゝき二人者ふ頭を並ゝく相語って後を流に人ゝれを測ふ者ふし神亀四年の春二人潛ふ山ふ入て遥に一峯ふ見る紫雲緩緋せり者ふ者ふ必ず垂拱ゝんとゝく竹庵ふ結んゝ安居清修に今乃

勝尾山ふられ徑行の地苔蘚ふして多獸群とふに者ふ共に嘆じて曰願ハ此身を捨に七必深利ふ供ん神護景雲二年二月十五日ふ仲竹庵ふ參して忽に飛去る年六十一爾後等語ぶして禪庵を同之年七月十五日天ふ冲ゝく西に没に歳仲ふ準ゝく知ゝ

○ゝく ふ開成皇子といふあり　光仁帝の御子　桓武天皇の兄ゝ幼しゝく敏穎佛乘ふ志に天平神護元年正月一日潛ふ宮中を出て勝尾山ふ入り石を畳ゝく塔をふし其側ふ禪宴に二月十五日仲等の二師山中ふ徑りを適ゝ此ふ見ゝく向て曰神彩羅覩ふしてゝ孔雀ゝ行のた先ゝに茶ゝ皇子素壽ふ生ゝる二師驚て曰已ふ四旬餘何ふ行ゝく喰ゝしゝ中ふ皇子答て二鳥物を銜ゝく石塔の上ふ垂ゝく我ゝれを掌内に甚耳美ゝり日々ゝくの必しゝそもゝり雨露ふも霑ゝ二人共ふ嘆嗟し誘引しゝく庵に帰る昇日二師に就ゝく剃髮受戒を其時本有の五智ふ證し法雷の五趣ふ悉ゝの二句ふ授ゝく菴ふ讓て化たり

初ノ小二師願を發して大般若經を書写を啓白の日黒雲儀ノ起く
雷地ノ震ありて霊所ニて般若を置んと親ら今乃取勝峠
あるとんそれより開成皇子當山の貫首ニて又般若を寫さん
とて洗金水を祈ら七日ノ滿ずる夜羅ノ容儀端嚴なる
夜冠の人ノ青綿の苞を持て石上ノ立て金を以て
師と共に泥墨とかさん皇子これを受て彼人あるやと問ハ彼人
偈を以て答て曰 得道以来不動性自八正道垂權跡能得解脱
苦衆生故弥八幡大菩薩 羅覽て几上を見ル金鋌あり 徑
二寸長七寸皇子感喜して其所ノ立る石今あるあり水を祈る半
一日夜羅見る老人北方より飛来る形夜又のぬし八幡宮 我ノ天竺
白鷺池の水を取て師の經滴ノ充ぶしと命じ吊信別源坊乃
南宮の神ノ寤て見るノ清水閼伽器ノ盈ぶ皇子これを汲て
大般若經を模寫を寶龜二年二月の羅ノ八面八臂の思を尺

丈餘百千の眷屬を率て各經帙を負て山谷に散を羅覽て
麁陳ノ知ぶ慰供の軌則を尋ぬ忽二者飛来て案文乃
儀軌を蕩に皇子これを問て供案に在と所謂荒神供ノ般若の
功畢て雷隨の地ノ道場を建て經を安に遠く龍華の會を期に
故ノ弥勒寺と弥に寶龜のちゞめ 光仁帝金水の事を聞て
官租を捨て如法堂を造ら桂窟の居を移し弥勒寺成就ノ
逮んで田牧百畝を投して寺產とに天應元年十月四日香燈を
ふ〻て西ノ向ひ低頭して入寂に寿五十八時ノ自茶師の像を
刻て奉事に遷化の時ノ像滴して花座に至ら今あ涙痕
新濕のぬし云云 傳聞講堂已ノ成て いちご本尊あ〻ば皇子
八尺の白檀木を得ひ出を以て像材とかさんとをひ〻ゑ人とも
良工あ〻ば寶龜十一年七月五日沙門妙觀て小木て四を結刻
まんて十八人の僧侶を伴て迷ノ千臂千目莊嚴端嚴の像成又

吹田
渡口

四天王の像を加ふ凡て五尊三十日ふしゝく成就に八月十八日妙観合掌
して化に從ふ所の十八人又に　観自在の日とは
○后妃國の后妃　國王愛妻　壮麗に適ふ　髮ふ　髮ふ
后　后　猛く　壷　茶　服し　法驗を求とゝ　一夕后
の爲に日本勝尾寺千手大悲壷感　あるべし　これを祈　后大に
悅んく日本に向ひ　祈願に怒髮　紺碧ふして　指に　ありとよりく
二人の官使　未潮し　件の旨　敵　熱　伽羅　金鼓　金鉢等の寶物を　持
本尊ふ　献し　件の旨　敵　熱　々ふ
○證如上人ハ勝尾山ふ住居しゆへ姓ハ時氏當國豊後郡の吏佐通ゲ
子なり弥勒寺の證道に陪ひ顕密の二教を學び修練ふ入さり凡く
住山ること年五十年あるは別ふ草庵ふむをびく言語ふ絶し
当練行ゑゝに一夕天樂空ふ響ひ　これを聞怒ふ人
有く戸を叩く證如垂言　ふて　磬をゝして　答ふ戸外の人曰我ハ
是播州賀古郡の驛民沙弥教信人今極樂に往生に明年今日
上人も亦我ぬくあべし聖衆と共ふ來りゆへと語り已く去ぬ
微光盧にかゝやく此より聚落ふ巡く佛教ふ讃説し念佛ふ

勸誘に貞觀八年八月十五日室ふ出く沐浴しく門弟子ふ告く曰
去年教信ゲ云來る日ふ相尚ること各ふ眠ら室に入ッく戸ふ閉
衣中金光耀煜し香氣馥く薫に天曉く門子戸をひらくに
ふ定中ふ端座して寂に年八十七
○當山六世行巡ハ智行兼備の名僧人　清和帝御悩の時勅使二度
すでもあり　しくも久しく當山の雲ふ外くいなゞ聚落の塵に交くに
容易出山を肯じさと申ゆれど勅使藤原佐道答天章土の濱王ふ
あるべとゝ半ゆ年勅命ふ背くやとあるべ行順松枝に茶産ふ
教く居に佐道帝て枝の下王土ふ住ゆふ服ぞや其時行巡一丈許
帝に昇ゆ佐道驚く山中ふ奏に　帝叡聞しゆひいよく渇仰し
帝て勅して曰宮中ふ入ゆ　ゆとゝ人ども願ハ覆護を密まよ　巡昂
法衣一領念珠一環を献ぜられを　帝の枕上に垂ゆ帝悩速に
平癒しゆ叡感の餘を阿闍梨ふ補らまこ今の庄園を寄附しゆ

帝の命ふかく詔ありかたく應せば　天子ふ勝をして弥勒寺と改名
勅して勝尾寺と號ス。尾ハ山の禁なり。上件五師の傳記ハ元亨釋書及
其ほか諸堂巍々として元慶年中ハ　帝ハ幸しゆ第二代實孫ふ
及ハ[illegible]ハ拾遺と号して寿永の比梶原源一の谷へ發向の時堂舍
を去火に其後頼朝公將軍となりゆハ財を寄附し尚山と再興し
ゆハ秦ハふハ然谷梶原と闘ゆ二階堂ハ承元年中黒谷の法然上人
土州より帰洛の時善導大師義中ふ告て曰淨土の布薩戒ハ授ん
播州勝尾寺ふ會をべし同年正月十一日夜善導大師来現しく
布薩の真戒を授く今ハ時の紀跡を壁板ふ遺ス二階堂本尊の左右
ふあり建暦元年七月十五日法然上人自畫の舟形の宝餞乃光中ふ
浄金ハをハく阿弥陀佛十聖の名號を書しゆハ今ハ存せり
其次のち建暦二年法然上人黒谷ふ於く入寂しゆハ塔ハ
尚山二階堂の艮の隅に建る其外寶器霊品多し

知足院　勝尾寺の山坂の中ふあり むかし多田滿仲公の[illegible]ふ幸[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ふ一朝故有て[illegible]ハ乃
[illegible]命ハ受主君[illegible]に代て命ハ[illegible]ハ一槽の極ハ
樹[illegible]ハ幸[illegible]ハ[illegible]ハ一盤陀石あり[illegible]ハ幸[illegible]石と
[illegible]天正の[illegible]ふ遇ハ今亡世に[illegible]ハ幸[illegible]ふ文殊の化身と
[illegible]居　和尚ハの[illegible]ハ画く　頌ハ一ハ曰

義堅侶石容潔如珠代主君命現菩薩軀舊房
今有感新畫以為圖文殊即幸壽幸壽即文殊

外院帝釋寺　粟生外院村ふあり　寶生山と號ス
古義真言

本尊帝釋天王　聖德太子の作　脇士妻財天昆沙門天
傳ふ弘法大師の作
帝釋隆滄松　堂ふあり　明神水　堂内ふ
あり
當寺ハ聖德太子の所建ス其後弘法大師もうに入山しゆハ貞觀
年中ふ　清和天皇勝尾寺ハ[illegible]ハ幸しゆハ初て山に入せゆハ
山上猪尾寺ハ部幸の内院ふ表し尚ハ外院と称しゆハ今地名と
ある年毎七月十八日ハ[illegible]ハ日[illegible]ハ遺迹ハ[illegible]ハ[illegible]して群をなせり

佐井寺　一名山田寺　佐井寺村ふあり
古義真言宗

本尊十一面觀世音　僧正[illegible]基威作
赤檀樹長二尺七寸
五重殿塔　尚ふあり二重石塔婆あり
[illegible]供養の塔ハ[illegible]ハ不詳

地蔵堂 門前にあり むかし此地に光明赫然たりしとて此寺を建たる地蔵菩薩の霊像を安置に出現の地なり今地蔵堂と云

佐井清水 尚ほ清水多しとて今に涌出に眼疾を癒へて感応ありと霊水滴々と明

行基山 当寺の西にあり今愛宕と云小祠あり本尊出現の霊地なり 遠眺 眼下に見へつゝく用水に紛れ絶勝なり 基山にあり又の名基松なりと云古松なり北麓の大樹なり

一本松 遠境にあり釋に見ゆる

鎮守 八幡宮 春日明神 牛頭天皇 を系に尚村の生土神なり 卯月十七日

天平七年二月十六日僧正行基堂に至りて此地を拓く瑞光あり昂其地を掘しめて梅檀香木の大悲の尊像を感得にて尚寺を建立

述に曰く奏聞しめて詔を得て伽藍を兼創し坊舎六十餘院の梵刹を成 禁裏御願経を執行し廿一ヶ寺の其一なり 拾芥抄に星霜累りて

天正の兵火に罹て堂塔坊舎一時に焦土となりぬ正保四年寺領の傍楽順再興の志願堂しめに領主板倉周防候捧鉢に寄附し銘を京師東寺長者亮春に書に 禁裏御願経の式に三代実録に見へたり

仏事根源云 愛宕御願経に二月八月大般若経に百敷に懺悔に四ヶ日の事

ふく米二の日ふく茶と云て僧に茶を給ふ事あり天平元年四月八日に

とゞまる 貞観の比ほひ毎年ふくれると云

伊射奈岐神社二座 一座は山田庄小川村にあり今五社明神と称に山田五ヶ村の生土神なり一座は佐井寺村にあり今春日明神と称に

延喜式神名帳に出又三代実録曰 貞観元年正月従五位に授く

蓮角池 山田上村にあり 慶長三百畝

横池 山田下村にあり 十畝

紐引塚 山田村にあり 由緒不詳

斤山帝釋寺 斤山村にあり 本尊阿弥陀佛 恵心僧都の作 座像長弐尺八寸 開基不詳中興教譽通秀和尚 保土宗

慶長年中の再建なり

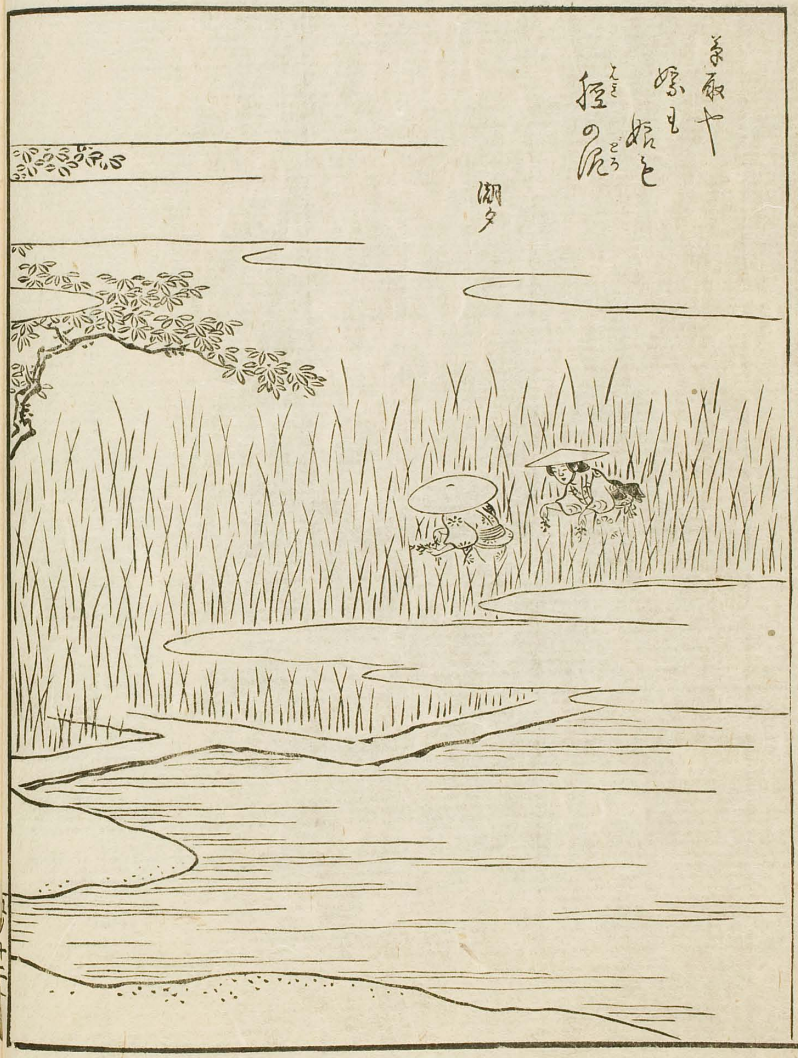
帝釋堂 坊内にあり聖徳太子の御作立像に尺八寸

圓塚 斤山村の田圃の中にあり由緒不詳

家の形を別に名て荒塚あり

虎宮大 村田圃の中に虎の宮と云神祠の古祠あり 森うり雨夜に火魂出る又土人曰火縄を見るとて怒濤と云て按ずるに初夏遇へ人大ふ怒る 雨の後黒地に暑熱籠り陽炎に自然と地中より火を生ず 地に去る事遠 件の人を送りあるいは人に光を出して恐るに足らず陽炎を捉めるもあり狐狸の火とも陽炎と云て日中に飛れざるゆえ多くべし腐草化して蛍となるの火なる故と天文志に也村の生土神なり毎茶

吉志都神祠 岩部村にあり七社明神と云て此村の生土神なり毎茶 正月十日日粥を煮て是を系に用ひて粥占と云


来取や
嫁も婿も
猛の尻
湖夕

名次神祠　崇郡村ニあり　大池　崇郡村ニあり　廣ゴ二百八十餘畝

三所神祠　二宅の東藏垣村ニあり二宅の莊

五ケ村の生土神なり

霊塔山幹前寺　味舌上邑ニあり　金剛院と云

真言宗

本尊薬師如来　仏基の他座像長四尺八寸　脇士日光月光十二神將

四天王共に運慶の作各二尺八寸

不動尊　弘法大師の作長八尺　移家　本堂の良ニ　西門跡　南ちよう毛町

護摩堂ニ安ス　あり

大正猪宝年中僧正仏基雄俊遊歴の時北方ニ紫雲の靈光あり昇仙正ちた至ル所に光彩に遇ふ此地に大悲有縁の靈場なるを稽合仏創をへりしそ稱くの祈願ニ応ふ霊験あらたなり仏基自ラ大悲の像仏彫刻して本尊とせり古い紫光山味舌寺と号ス郷中も此寺の領地の時あれと味舌と号に一年賦を納ひ村民あるを仏陀くしくも仰かし一村に大悲の殿内より数千の蜂郡出く賦徒仏退退けて安堵あるくむ古より改て霊塔山幹前寺と号せり万治年中宥清阿闍梨再興して中祖なり

味舌神祠　一座ハ味舌上村ニあり　一座ハ味舌下村ニあり　二柱神牛頭天王一座ハ味舌下村ニあり　二柱神

古ハ八幡宮此地ハ織田有巣命出延の地ニ信仰ニより今ニ八幡宮と称ス

○味舌宮　按津志ニ曰別名味舌二村のうちに其古蹟なしに日本紀

孝徳紀を引書し又延喜式味原牧等昇ニ此地なしに味原ハ大坂の

東小橋の四名なり又味舌宮も其辺なり　按るニ味舌の文まにまりくちた

出せるとなりなり　妻ハ東成郡の郡下にあるにに

吹田渡口　淀川の支流神崎川ニ吹田村より

西成郡新庄村へのりしく

吹田神祠　吹田村ニ二座あり牛頭天王　素盞嗚尊　明神と称ス此所生土神なり

又名歳社ともいう上古ハ水田と書き

茅の名をさほいのうちさみれ吹田の名に

仲哀あり一説ハ小千貴の紋めれにはあそふ

後後撰

川辺の内ちくいつくしうつのあるぬ藤とかけそ霜と定めん　太上天皇

高濱　吹田の濱をいふ又摂津郡ニ同名あり又本集摂津国

又越後国ニも同名あり

後後撰

朱て見えしかの世も色ぬ高濱の松ふむとある鶴のけ古藤も　太上天皇

文本

貴き世の君といはんと白砂ニ名も高濱に秋乃秋の月　為家

同

栄へ川ちさ位ハ高濱のふしとせの表ハ千代とあらん　隆季

同

高濱の真砂ニそ松の根もそまくもいくぬつるちろ・の和　光俊

高濱山観音寺　吹田村ニあり浄土宗

秀通院と云

本尊聖観音　仏基の作長三尺八寸　脇士左多門天　毘沙門天の作右

毘沙門天ニ毘光　輝光あり　将軍地蔵　聖徳太子の作　聖武帝御宇天正年中

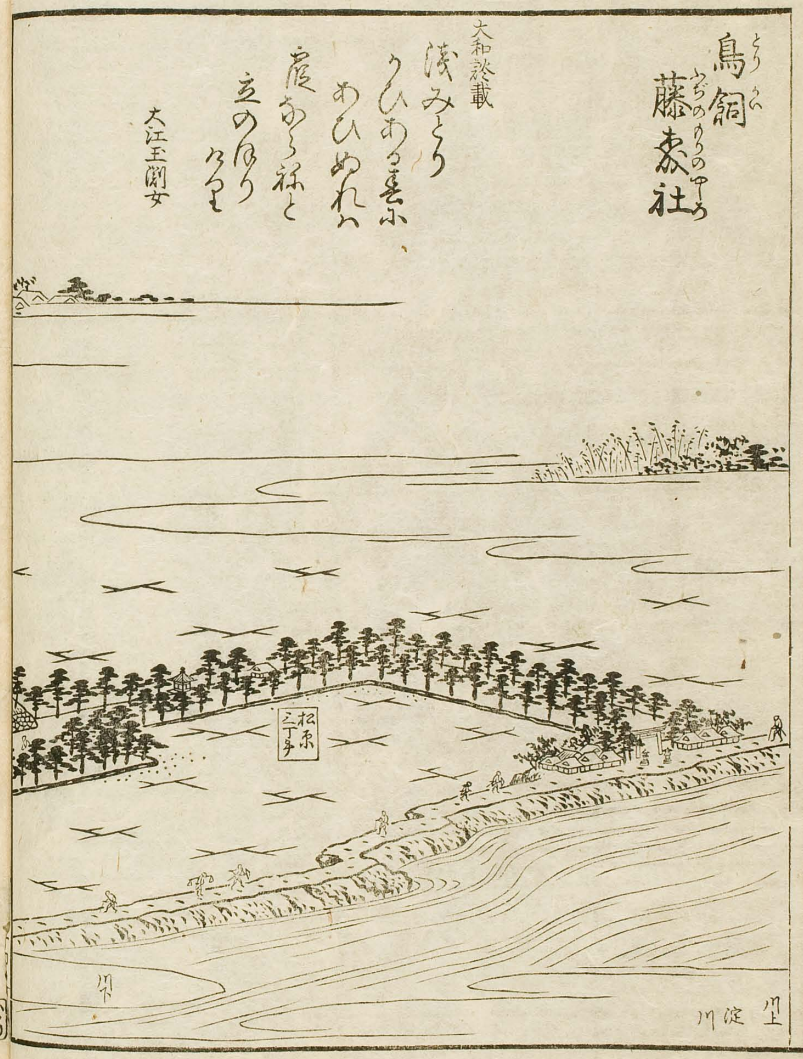
瑞光の中に梅檀香木あり　仏像有縁の地なり　一説に半の正

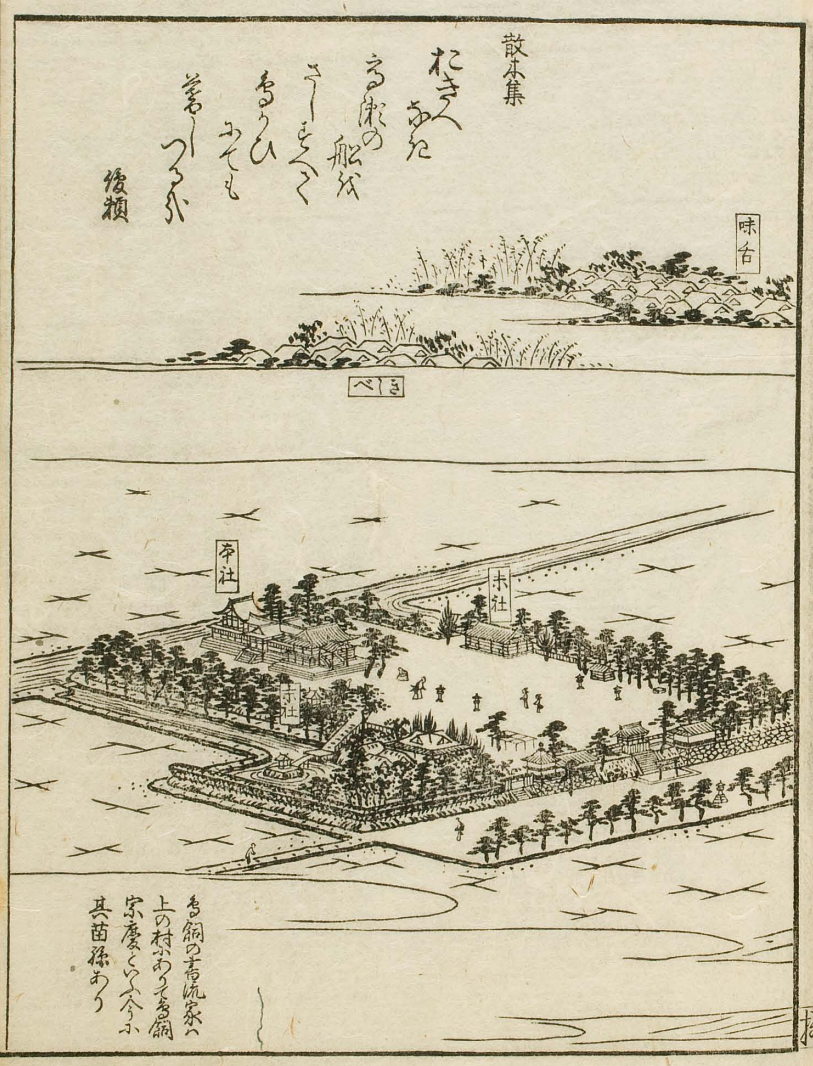
観音仏ニ小彫并に其村異香四方ニ薫し　爛て光明皇后御年額と

して稚拙仏建営し　仏菩薩容仏安置に世俗慈の観音と云ハ初メハ法相宗

ありしか中興心響上人より浄土宗と　小女帝狐祠　岡境昔蒲池の

改て今の本尊ニハ阿弥陀佛仏安に　傳ニあり


鳥飼
藤袁社
大和談載
淺みどり
うしある素ふ
あひめれい
度あり祢と
立のほり
大江玉圓安
松原二十丁
淀川


散本集
たきつあた
る風の船代
さしまくく
ゆくひ
みそも
著しつるふ
後頼
味右
べいき
本社
本社
本社
鳥飼の青流家ハ
上の村ふあり其鳥
宗慶くいハ今ふ
其苗孫あり

牛頭山護國寺

吹田村にあり　禪宗曹洞

本尊地藏尊 大徹和尚の作本願ハ足利三代將軍義滿公之開山宗令大徹和尚ハ大隅の人也康暦二年當寺を草創し地藏尊を造て正殿に奉し夫より越中の立山に詣て宗風を愛し寺を建く立川寺と号し又南明寺を開くみな大徹を祖とし其後立川寺に住し時衣冠の人出来りて大徹に戒法を授らん事を乞ふ師則無相乃禪戒を授け法に其異人禮謝し立山に昇て空に飛し去は衆人初めて白山權現なる事を知れり一日師坊嶽山の室にかへりて在命し先生日我死後荼毘せば骨灰を取て遠く去る事勿れ只此山に瘞め我幼軀なり像師の徳を慕ひ事を厭ふ又云地藏を造て護國寺にあり我幼軀なり傍又に肖像を立る事なかれと云終つて寂に春秋七十 伽藍記大意

東光山禪福寺

同村にあり　禪宗海家

本尊藥師佛 座像長二尺八寸唐佛師祖宗直ハ和尚慶安二年の草創本願ハ攝州清太夫長政中興南江和尚檀越ハ大坂淀屋个庵居士なり

慧日山常光圓備寺

同村にあり　眞言宗

本尊聖觀音 行基の作長二尺五寸許開基行基菩薩天平七年の創建也畿内四十九院の其一院上古ハ七堂伽藍坊舎十二ヶ寺あり文治二年正月十八日禁裏勅願法皇朝鑑和尚當寺の縁起を書に今に傳來れり又新菩提院義滿公再興の寄附状あり應仁年中の兵火に焦土と成り年久しく荒廢に及びしを近年正保三年再興に世に濃堂となる

鎮守 氣比明神　牛頭天王

涸池

吹田村にあり　夫木集　攝津國

夫木　よしやそれ涸の池に身をなかしても心の海に月やとらん　西行

同　袖ハ去ち渡の池に目かありて露見ぬ渡ほしさ吾妻のを袴なく　成尋法師母

俗諺云むかし此地に悪七兵衛景清が伯父入道大日坊といふあり壽永の比八島の軍敗を逃きたりて潜に伯父入道眠藏に隠し軍労を扶く或日温麦を早くすゝとらふを景清聞て謀らく伯父入道を害して返れしか討く源氏の方へ行さんと謀りとふひ思んて入道を後殺して寺を逃去て此池水にて血刀を洗ふこれより世に悪七兵衛とこふ和つく池水を向けし亡霊を吊ふ故に景清涸池と称じちれ忘謗にして土人の口称にのミ遺まり涸池西成郡小松村も同名あり古人の和歌あまこ壽永のあまこの名なるべし

二魂坊火

むかし吹田村に日光坊とて弘法あり法力を争ひ互に釼刀を以て遺りく雨夜に火の魂二ツ出て野外に争ひ樹上に止りて往来の人を劫かされと二魂坊あるひハ日光坊が火ともいふまた虎宮の火といふかく地中の暑氣陰陽に觸してあらはるゝなるべし斑猫の火も同し事なく恐るゝに足らず

鳥飼御牧

淀川の中馬飼ハ御牧の古跡也長サ壱里許いまにより洪水にも崩流せず又鳥飼に亭子院の舊趾あり桂女白女の和歌を讀し所也

延喜式曰

凡諸節及行幸應用國飼御馬者勘量須數奏聞乃下官符令進唯牧放飼馬者寮務當國郡令牧子牽送　但攝津國鳥飼牧豐嶋牧不在移

當國ニ寮ヨリ直ニ放繫ク凡國飼ノ御馬ハ者攝津國ニ十疋 右寮 又同式曰 攝津國爲飼牧 左寮

土佐日記云

二月八日なほ川のぼりになづみて鳥飼の御牧といふほとりにとまる 云云

藤杜神祠

鳥飼西邑にあり 此地五ヶ村の生土神なり 例祭九月九日 山州藤杜崇道神社 崇道天皇を勧請せり

三本松天満宮

同所にあり 菅公筑紫御下向の時こゝに船をとゞめたまひし旧跡なり 此村に下り松義経松蹟を松とてあり

高瀬里

鳥飼の東にあり 今旧名を喪ふ 攝陽誌に高瀬は山高瀬川澪下郡に入といふ 謬なり 高瀬川は淀の河内國之

夫木

さしのぼる高瀬の里はいてはらにかよふ人なき五月雨のころ　衣笠内大臣

野宮

鳥飼村の属邑野宮村にあり 江家次第に云 難波三所野宮の其一なり

水江

野宮村をいふ

新古今

芦鴨のさわぐ入江の水の江の世にすみがたき我身なりけり　読人しらず

佐和良義神社

西澤良木村にあり 延喜式出 此所三村の生土神とす

井於神社

宇野辺村にあり 延喜式出 今三所明神と称す 鳥飼村の生土神とす 例祭九月三日

郡神祠

郡村にあり 郡村郡山上野の生土神なり

宿河原

宿久荘にあり 延喜式和名類聚等に出 元亀年中羽柴筑前守秀吉公の御陣所なり 宿河原は川辺武庫八田郡にもあり

つれ〴〵艸云

宿河原といふ所にてぼろ〳〵おほく集りて九品の念佛を申けるに外より入くるぼろ〳〵のもし此中にいろをし坊と申ぼろやおはしますと尋ければ其中よりいろをしこゝに候かくのたまふは誰ぞと答ふればしら梵字と申者なりおのれが師なにがしと申し人東國にていろをしと申ぼろに殺されけりと承りしかばその人にあひ奉りて恨申さばやと思ひて尋申すなりといふ いろをしゆゝしくも尋おはしたり さる事侍りき こゝにて對面したてまつらば道場をけがし侍るべし 前の川原へまゐりあはん あなかしこわきざしたちいづかたをもみつぎ給ふな あまたのわづらひにならば佛事の妨に侍るべしといひ定て二人川原へ出あひて心ゆくばかりにつらぬきあひて共に死にけり ぼろ〳〵といふもの昔はなかりけるにや ちかき世にぼろんじ梵字漢字などいひける者その始なりけるとかや 世を捨たるに似て我執ふかく佛道を願ふに似て闘諍をことゝす。

放逸無慙なれども極あるべしとも死をうくべしとおもはるるこのいさたに
よくおぼえく人のうたがひうたがふを信ずや　云云　ばうくの接会に部出
村の外林の中ふかう

須久久神社二座　鍬靱の延喜式出　宿久庄村ふあり　山井清水　清水村ふあり　寒暑ふ間に

馬家　郡山村ふ二町ばかりにあり　正元年将軍義昭公山州真ふ嶋の城に據
ふ所織田信長これを攻る義昭公敗走し士卒多く討死を
其中ふ和田惟正惟正遠にちくふく敗北に惟正ふ楠正武の後あり

清秀と戮ひ惟正遠にちくふく敗北に惟正ふ楠正武の後あり

茶臼家　郡山村の東ふあり　塚の形とてなくなれり　道祖神洞　道祖神村ふあり

道祖神洞　柔神猿田彦命

白井蛍見　郡村白井のあ辺に初蛍の来るを蛍ちし土人云天正年中
明智日向守光秀が一族残党の鬼火とて人ふ山州宇治の
蛍ふ源三位頼政の亡魂とて人それ蛍ふ礼記に腐草為螢
化して蛍とあるを格物論ふ曰蛍ふ腐草及び爛竹の根より化する
初ノ蟹虫の時こそふ光あり数日ありて便変しく飛死し基
湿の地ふ生じ大暑の後ふ生ずと人ふ光ふ発して光ふ発して一名
枝光一名燭耀車紀ふ書を照し劉子南ふ蛍火を佩くと云ふ又山州宇治の
七魂ふ射休の蛍ふ土俗の諺ふ云ふ和名抄に勿忘草頼政の文武兼備の人
孫ふ名ふ集ふ義経の墓ふ遠人ふ信義の敵ひ平家滅んの時ふ
家集ふ義経の墓ふ遠人ふ信義の敵ひ平家滅んの時ふ
七魂蛍ふ三位公ふ

牟禮神社　中村ふあり延喜式出　牟礼中村等の生土神ふ　大家　上中條村ふあり

海北家　福井村ふあり　宮北池　倍加村ふあり　廣サ二百六十間

佐保山　佐保村由緒ふ詳　高山　高山村ふあり四面平曠ふ孤峯ふ聳秀ふ故ふ名とす

泉原山　泉原村の上方ふあり山腹ふ泉ふあり故ふ名とす
山麓ふ泉原村の上方ふあり山腹ふ泉ふあり故ふ名とす
山麓ふ泉原村ふあり山頂ふ上ふ城の跡ふ出を
國見山　瞭然とし遠く眺ふあり　遠ふ一州の風景

鳥居峠　羽村のうちふあり古れより丹波ふ折村へ出ふ
山神の多ふ生ずあるふ

忍頂寺山　忍頂寺の上方ふ山路最嶮
忍頂寺の上方ふ山路最嶮
橋を踏んく攀躋ふ

忍頂寺　忍頂山の禁ふあり寺令院と号ふ真言宗
山ふあり寺令院と号ふ真言宗

本尊正観音　開基開成皇子ふ実録曰貞観二年九月廿日丁卯
傳燈滿位の僧ふ澄奏言ふ神峯寺
澄奏言ふ神峯寺
真言の一院ふ名を忍頂寺と賜ふ建立せしなり所ふ請て作
寺庫ふ織田候細川藤孝中澤飯尾
右馬允等の寄入文ふ蔵む

大門寺　大門寺村の上ふあり　旧名青龍寺　真言宗
題詠集　金題詠集等ふ見へたり
本尊如意輪観音　開基開成皇子の作
長さ尺許

白井
蛍狩

當寺ハ於く文禄四年七月三日本村常陸介自殺に石碑今なを立に　大塚　大門ま村ハあり由緒不詳

幣之良神社　耳原村ハあり　鍬靫延喜式出生土神とん

幣社　社頭の神鏡ハ

月夜ふもとゝ社もとゝ民やしゝ志ゆあん　境内に

御ゝ庄家　は村ハあり又藤塚ともゝ又同村ハ大家とゝあり行ゝも上古の荒塚之天正年中ちに明智光秀陣所とせゝ所く

安威川　丹原丹州桑田郡熊毛岳より出く本郡佐井羽鉄原ハ流く車伝生保安威大田西川原ハ流く猪牧の荘ハ入く隙杭川とゝ別府ハ至ゝ

神崎川ハ入

阿爲神社　鍬靫延喜式出　安威村ハあり

今苗麦明神　称に

大織冠鎌足公荒墳　安威村の西ハあり方二町許一堆の丘ゝ安威山巔ハ石窟あり墳ハ華表あり土人将軍塚

和州多武峯ハ改葬に桃と称人後に遺骨を掘く闘争ハ鎌む故ハ一名鎌墓とゝ

又改葬の時此家鳴動をちれハ人ゝ敬の家ともゝ家上に名杉

あり笠杉とゝ墳の上を覆ひ雨露をふせく少く名ハ

日本紀曰

天智天皇八年庚申天皇遺東宮天皇弟於藤原内大臣家授

大織冠與大臣位仍賜姓為藤原氏自此以後通曰藤原大臣辛酉

藤原内大臣薨　日本世記曰内大臣春秋五十薨二十私第

又碑曰春秋五十有六而薨ス云云

二代實録曰

元慶元年十二月十三日己卯勅定毎年獻荷前幣於五墓

帝王正統録曰

贈大政大臣藤原氏墓　下畧

御食子大連子大織冠鎌足　天智天皇時改中臣賜藤原

内大臣正二位藤原鎌足子不比等右大臣從二位贈大政大臣

藤原淡海公也　云云

釋定恵大織冠の長子之初　孝德帝の妃あり妊身ハしく六月

大織冠寵遇ふ子ハ妃を賜ふ人ゝ約しく曰産ハ

所の兒男子あゝ臣ゝ女子ハゝ朕ゝ子とせん既ハしく

男子を産ゝ故ハ鎌足の子とゝ沙門琵琶に投しく出家させ名ハ

定恵と號に白雉四年遣唐使ハ隨ひ海を渉ゝ初唐の代長安城ハ

到ハ高宗の永徽四年く慧日寺の神泰ハ師とゝく習學ゝる年熟く

十年調露元年　庚の代の年號　百濟の使ハ伴く白鳳七年秋九月ハ帰朝に定恵

廣ふ左に時大纖冠をそふ薨に定恵等の丞相不比等ふ向て曰先墳を
作るの所を對く曰播州阿威山に定恵ふ葬ふ先公むの潛に
つるふ語りゆ〻和州談峯　多武峯　霊勝の名區大唐の五臺山に
比へ我ふく成墓とせば子孫益昌んと寛へ我身五臺山ふ立る時
爰成見ふ先を告く寛へ吾をぞふ天に生ふ汝談峯ふ寺塔成営を
佛象成修せよつるも亦ふく成ふ後昆成擁護せん時に巳巳の歳
十月十六日の夜二更あり丞相薨巳く湧泉して曰先君の薨ぞる朝
其年其月日あり師の爰徒ふ〻ぞ官人を従く阿威山に葬る
遺骸成携く談山に改め葬るとゆひろと爰　巳上元亨釋書
委い大和名所圖會出ス
太田神社　太田村ふあり延喜式出俗傳云相殿二座内宮外宮天王成系ふ
太田古城　太田村ふあり上古ふ石風呂在とい東鑑曰鎌倉隨兵太田太郎
左城せりそれくり太田と改むゆ南朝年號正中年中ふい太田
賴基ふくに宅地
ありしそ
雲見坂　太田村ふあり太田賴基ふく〻ふく天文を尽く去郷成考へ軍乃
隈敗成さやりし所とい

繼體天皇陵　太田村ふあり二條ふい上古の莊ふ藍野陵と號に二條ふい上古の莊ふ藍野陵
いゆ〻への地名ふ中古ふ太田郡と改む今總持寺の制れし
ふ見へくり延喜式ふい摂上郡とあり今摂下郡ふ属に陵の封境方
六十間許ふ陵上ふ石棺の發くる形の石四つあり石ふも大サ
五尺許元禄年中公命ふくり川ふく所改の命成石農家に散在せし成
元禄ふく元の地へ立しを遷しそれくり巳方ふ備を結まいし不許
乱入の御制れ成ふ今ふ土人沈上陵とい又ふ祠五ツ傍ふあり又ふ祠
あり年頭天王八幡宮成ふ
日本紀曰
男大迹天皇　継體天皇更名　譽田天皇五世孫彦主人上子也母曰二
彦太尊
振媛振媛活目天皇七世孫也　同帝五年冬十月遷二都山背
筒城　同帝十二年春二月丙辰朔甲子遷二弟國山背乙訓　同帝二十年
秋九月丁酉朔己酉遷都二磐余玉穂一大和國　同帝二十五年春二月
天皇病甚丁未　天皇崩于二磐余玉穂宮一時年八十二冬十二月
丙申朔庚子葬二于藍野陵一
帝子傳曰
○應神天皇集總皇大々迹王私婁王彦主人王
○繼體天皇　人皇九七代　在位二十五年
延喜式曰
二嶋藍野陵磐余玉穂宮御宇　継體天皇在摂津國島上郡兆域

東西二町南北二町守戸五烟凡毎年十二月奉幣諸陵及墓云云

凡諸陵墓者毎年十三月十日差遣官人巡撿仍當月朔日録名申省

其兆域垣溝若有損壞者令守戸修理專當官人巡加撿校云云

女九神祠　上毛村ふあり系神ふ詳ふ古の生土神とん例系十一月十日土人日むり　継體天皇崩しゆへ附十二人の妃の中九人殉死せられしを陵の傍ふ葬まるふ故ふとそ

其證ふ詳

溝橛神社　溝杭莊馬場村ふあり延喜式出日垣村十一村二階堂村等二村の日本紀日　生土神とん

事代主神二條溝橛耳神之女玉櫛媛所生兒号蹈鞴五十鈴媛

令是國色之秀者　神武天皇悅之九月壬午朔巳巳納蹈鞴

五十鈴媛命以爲正妃

茨木　又茨城と書に町名ハ四條下郡都會の地ハ交易の商人多し茨木城ハ福富氏築く築く中ハ中川淺秀居城し其後行桐東市正則之居城に

茨城川　一名佐保川ふ添二流一ハ佐保山より流る一ハ猪尾山より流る二水中川系ふ會て

茨城川ふ鞍川と云畑田倍加茨木沢良寛公屋ハ二宅に至り未ハ安威川ふ入

東本願寺御坊　茨木ふあり教如上人向基城州伏見江州大津當寺等ハ

梅林寺　茨木にあり伴土宗中川瀬云清尉清秀の菩提所ハ

故ふ清秀院とい

天石門別神社　茨木庄ふあり延喜式出ハ地の地主神とん

系神豊磐間戸命

茨木神祠　日所ふあり系神中央素盞烏尊　左玄日明神右八幡宮　茨木

庄内上中條下中條の生土神延喜式の神名ハ喪ひあるひも藏し

○因ふ云凡く村里の生土神ハ例系九月十日

午頭天皇と祝し神代の天神を天滿天神とぬひ又ハ八幡宮

稲荷玄日と唱ハ来ハ国ふ限らず山城大和ふも粗見ハ云則ち

神名のむりしたを嫌ひ云則ち名ハ神号ハ略して一村の

生土神とあるとハ世上みな此義と思ひ誤るなり元亀

天正の比織田信長公四海掌握の計策ふより南蛮國より邪宗門

を招き寄せ比叡山を焼討ふし大坂石頼寺ハ攻高野ハ亡さん

し其より諸社諸山を滅亡せる来多し初ハ日蓮宗ハ信し

此宗徒ハ諸山ハ滅さんとし日蓮宗ハ邪宗門系都に来人もあり多くハ

うそ又此宗徒を追放に六ケ年ハ間此宗門系都に来人もあり多くハ

泉州堺津ハ伊勢中の方へ逃遁ハ織田候亡び後ハ

豊臣公に至りて元の地へ帰却せる来多し後ハ織田方ハ右近左城し

此辺の神社仏閣ハ破却せる来多し後ハ神社の中に於ハ

天照太神祇園午頭天王八幡宮春日稲荷天滿宮ハ神廟の名神

破却せる来ハ恐れ慎しし此ハ人ハ

延喜式の遠た神名ハ多ハ隠して名神の神名ハ

鬼ハ此ハ信ハ長の生土神ハ尾州津嶋午頭天皇ハ

殊ふ信長の生土神ハ古代の神名のかたるハ多く此ハ祈願にとなく

黒井清水　茨木の社の後ふあり名水ハ多く是暑時減なし

千石松　茨木社者井の後ふ植ふ名ハ

千石松ハ

茨木社者井の後ふ植ふ名ハ

故ふ千石の松ハ

古廟
わの村

たいしろくのこぐう
大織冠古廟
安威川

新屋坐天照御魂神社二座

西川原村ふあり延喜式神名帳曰名神大月次新嘗就中天照御魂神一座預相嘗祭云云

二代實録曰貞観元年正月授従四位下同五月新屋坐天照神伴酒着神并授正五位上云云　○天照御魂神一座ゝ西川原村ふあり　辺藤七ヶ村の生土神ゝゝ一座ゝ福井村にあり　今天王と称に上梁文ニ曰天正十二年八月領主中川瀬兵衛清秀之座公造営に一座ハ上川原村ふあり称しく天照太神やつ〳〵ほ水村も亦祀公共ふに

便の水

神籬の内あり　神社頭月家集

月かけハさえふけ〳〵ふか神籬やよろゞの水ふつらなるまで

よろゞの水社頭の神水く世人水と疫水とりふちに朱く濯ふ社ハ急に抜ふるとぞ　天照御魂社の神水あれを面貌の疫ふも病ゝ邪念の穢もなくなりけるあるべきさらんや　ほ浦

むかしハ此ほ水住澤みなく田畝数千頃と書へ後世社公北ハ遷しとなく林樹公伐採し開墾して田とふにたり　ほ水ハ開ゝく水とある所謂君子不伐家木とりふ事故ある事

王の井　拾遺志　書

井保櫻

疫水の小ふあり此花本希代の大樹みて亜を成ふ只一本あるく遠近ゝ人ゝ口ゝ根本ゝを周井上ゝ株二十余に別もく巨方繁茂し小枝数千あり一本の周ゝ五十間許なり花ハ山桜のおし小梅伊勢桜ともいひ花ハ色の盛ゝ七十日間許く其年の寒温にもよりて花及び遅速ゝ

妖艶なる花の盛り
櫻と躑躅の側に
あるゝゝく藤棚と
落ちる半ばの
とゝの山ゝゝ
山のゝ藤棚の庫
鞍の毛珠に似
されとさもある
つゝ半ゝ

茨木明神社

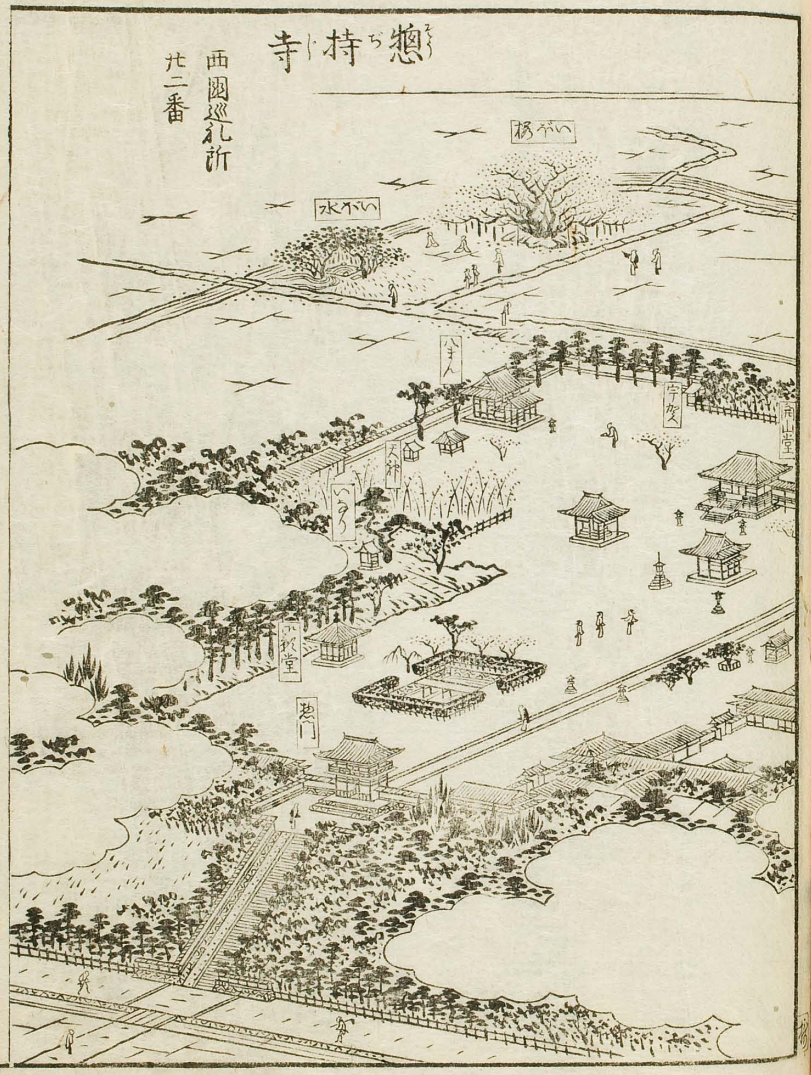
補陀洛山惣持寺　寺領惣持寺村ふあり真言宗古義
西国巡礼所第廿二番
本尊十一面千手観世音　和州椿観音化現者ゴの他
脇士　左ハ日明神　右ハ天照ス神　試観者　方丈ふ安置に本尊と同他
奥院　本尊阿弥陀仏　山陰政朝卿廟　奥院ハ町東ふあり
恵心僧都他　山陰の室息女等の塚と
薬師堂　同村の中ふあり本王寺と号に
本尊安阿弥他　長弐尺八寸
古鐘銘　朝野群載ふ出さり其銘ちひく今新鋳あり古銘ニ曰
粤ニ祖父越前ノ守藤原ノ朝臣歸ニ心ヲ於普門妙智ニ頌ニ
首ヲ於無礙大悲ニ而墜ニ露盡然閃電倏爾納言尊
考軫ニ先業之不ニ遂歎ニ善因之未ニ成多以ニ黄金ニ附
入唐使大賀御井ニ買ニ得ニ白檀香木ニ造ニ千手觀音
菩薩ヲ曰ニ惣持寺ト於是第二男備前權介公ニ利鑄ニ
豊鐘一口ヲ干ニ時延喜十二年夏四月八日

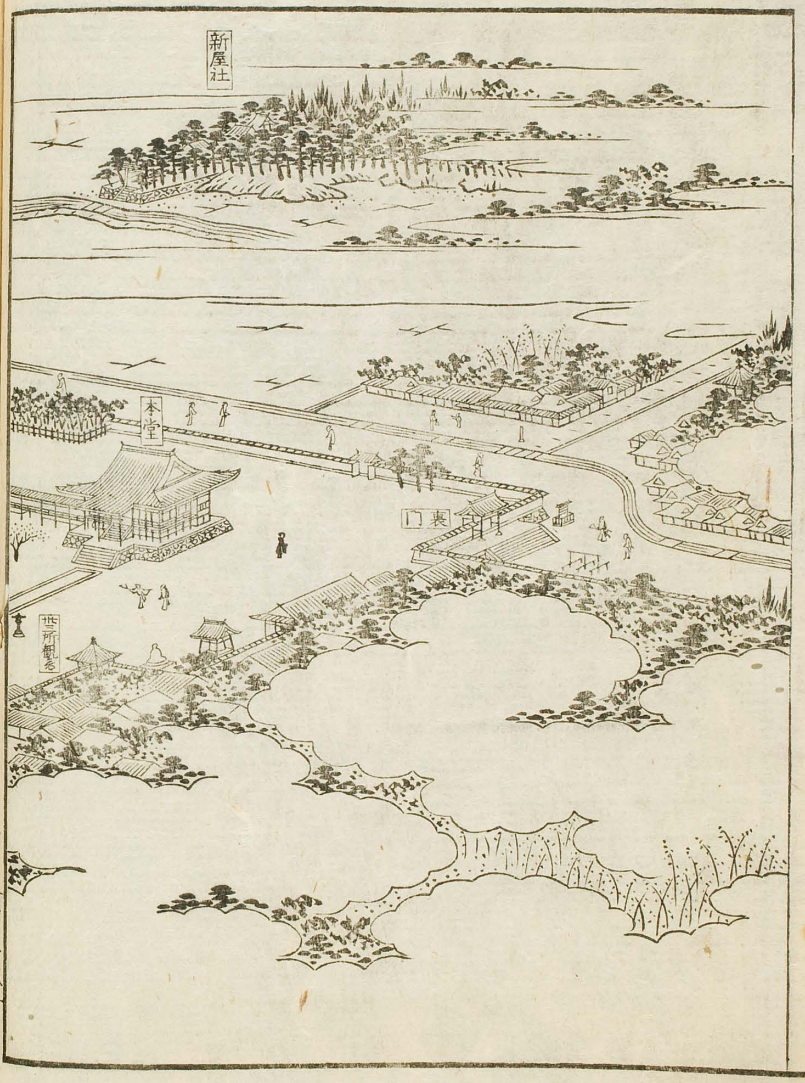
惣持寺ハ　宇多帝寛正二年越前大守藤原高房卿の建創
ふしく一條院　後一條院　白河院　鳥羽院の四帝行幸ありせられ
勅願所と成左国公賜ハ厨后　後ふ松院宿舞の寺記公賜ハ今
ゑ公存せり元亀年中高ふ右近ガ去火ふ諸堂とくく灰燼とるふ

其時尊像火中に在く焚ふ半ふ一慶長八年六月豊臣秀頼公
諸堂再興ある寺行ハ庁桐東市正と称ス剛ハ
（御蓋角基記之意）
播州揖ト郡ふ名刹あり関西二十三所観者の霊場ハ初越前大守
藤原高房卿志性清慎ふく考ふ観自在ふ帰ニ兼和ヤ筑紫
太宰府に遷る嘗く舟を淀川に乗して徳積橋に至ふ時ふ漁人
亀公多く携ハ引高房これ公悲く贖く川水に放川悄然そして曰
今日乃大士の誕辰と其ふた一ツの大亀首公挙く高房と顧去る其首
二月十九日の夜東の山嶺ふ玉鬼消昇る乳姫ふ公子を抱く悍く多中に
墮ークんでる房愕然そして観者公念に怨一亀ふの兒公屋く水面
ふ浮を微笑をる公乃るる房大に喜びく曰信に大悲の神力ふ
昨日亀公放ツ今日子公救ハ行を感應の速あるを遂ふ宰府に倒ふ
時ふ唐國の人僑とふその有くる房ふ其に語ツく曰我大悲の像公
造んと欲ス材ども無ふ良材を得ハ人僑の曰吾本国清涼山の麓乃

湖中ニ白檀木あり時々光を放ツ高房収び檎の黄金を人倩ニあつ
国ニ帰ることむ人倩既ニ像材を得て昇日本一洲さんと官府に奏に
拙僧もまれと許ざりそれを人倩其木に文字を彫く曰海檀
香木 張之尺六寸 周四尺八寸 日本宮房ニ寄ぬくのぬくしく東海ニ浮む高房
薨じて後黄門帝政朝又鎮西ニ遷つて国中を巡りをなた村民
皆く曰ハ海辺数毎ニ光あり黄門其所ニ至つてまとをなるニ清涼
の香木を感激特ニ甚しく當ニまと親自左の應験を早く大悲の
像を造つく君父の遺意ニ報ぶべしとく香木を携へく京師ニ引く
播州播下郡ハ地ニ至て留く憩ハ所に像材を求た東磐石のぬし
黄門驚て密ニ初咒して曰若あれ縁あるを尊像成就の後ハ
地ニ安んべしまくに於く得た事故のぬし良工を擇た就く
和州長谷寺ニ詣しまとを祷る七日おしく大士告く曰明晨
その人に遇べし翌日果して一人の老子鐫刀を持て来ニ其形

甚醜し黄門問て曰汝よく五省ニ大悲の像を刻まんや老子
答く我拙なあれども君を許ゆゑ彫刻せんと黄門大ニ喜び伴て
京師ニ帰る家人老子を視て議して曰ハ良材再び得難し先他木を
以く試みとハ昇ニ像を作るニ其貌絶妙なる故ニ一室を構へく
老子を延くまとを造しむ老子曰ハ戸を閉く千日ニ千臂を刻まん
黄門まとを諾して齊戒精進を乗ニ三載朝ニ臨んで戸を開たまと
視るニ老子の所左を右ぶして大悲の像儼然として莊嚴具足の
尊容を図顕當ニ新る老子即長谷観者の應化なる像の霊験
ひちぶる未曾あるべして黄門没去に時ニ仁和四年二月四日を息ニ
七男七女あり寛平二年先父の大祥忌に値く遺誡あるを今の地ニ寶殿
を創して老の像を安に帰て補陀洛山總持寺として寒福を薦しむ是
より霊應益新なる厥后 後ニ松帝寺記の宸筆を賜へまくニ於く愈
光耀を増し四衆これニ謁をる半あの教ニ到くぶ也


惣持寺
西國巡礼所
九二番
水かい
柳かい
小人
宇多
閻堂
天神
小祝堂
表門


新屋社
本堂
裏門
世所觀音

嶋上郡 東南は淀川を隔て西は摂下郡界に限る北は山州乙訓郡及び丹州桑田郡界に限る

冨田 町名廿四負者上郡の都會の地なり交易の商人多し

三論神祠 冨田郷の生土神と例祭五月六日祭神大和國三諸山の勸請なり一説に三論門宗の鎮守の祠の棟札に日寛永年中龍溪禪師再興

春日祠 三嶋社の傍に有り

慈雲山普門禪寺 旧郷三嶋社に隣る禪宗原鐘倉建長寺の末寺なり今京師妙心寺の風格安寺嶋番所

佛殿釋迦佛 長三尺八寸 櫺の額 狩榊 芳蘭 隆元筆

後水尾帝神牌 共に方丈に安置建具の繪畫の山水狩野安信筆 後水尾帝の圖画世に名高し

開基説巖和尚 本願細川右京太夫晴元

昆沙門天像 永禄年中建営 食堂に安置弘法大師の作天正年中高山右近高國の神社佛閣多く焼失に付昆沙門天去年中に一夜念怒の相顕れ城の守護神と敬軍敵を滅ぼす事霊験今に著し故に寺を急難の擁護の尊天と崇む

冨山擁護の尊天

冨山養壽院本照寺 冨田に有り 浄土真宗 毛本願寺に属す

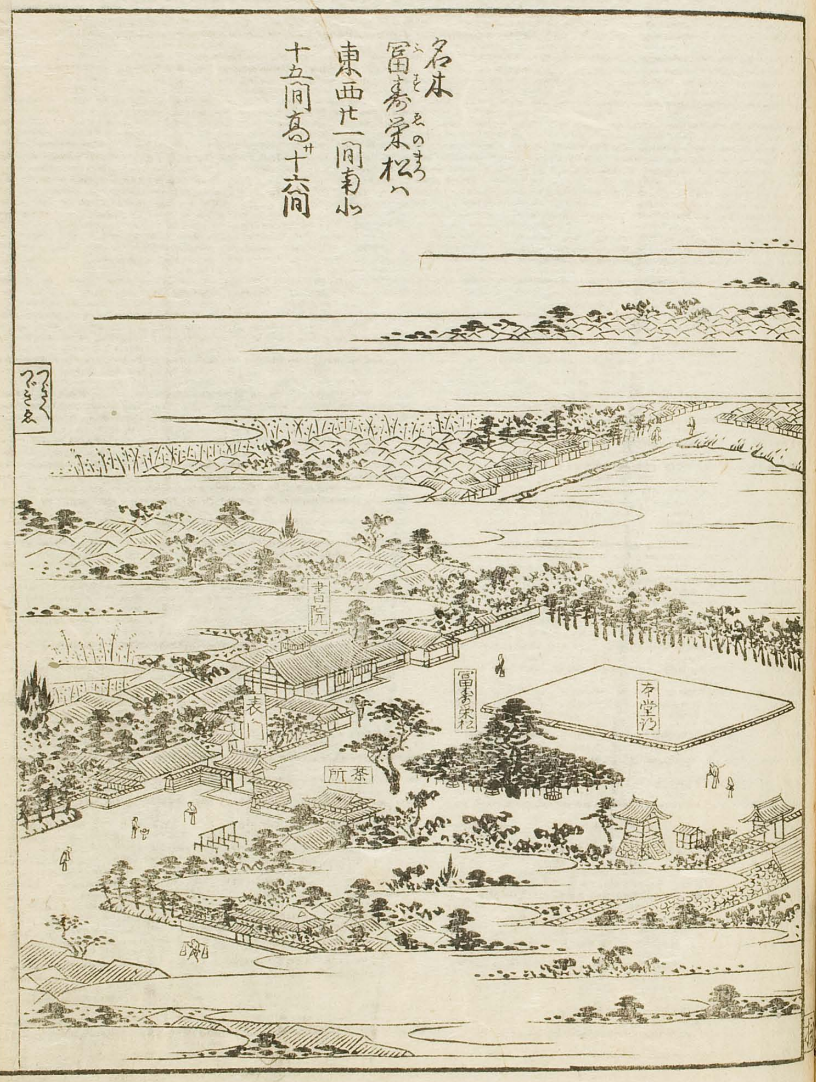
本尊阿弥陀佛 安阿弥の作 長六尺八寸

宗祖親鸞聖人彩真向等身の尊容と称す左脇檀に安置す 七高僧本山第一代上人の彩右脇檀に安置 龍盤のぬく座上に蓋覆す

冨壽榮松 堂前に有り 高十六間東西廿間南北十五間あり

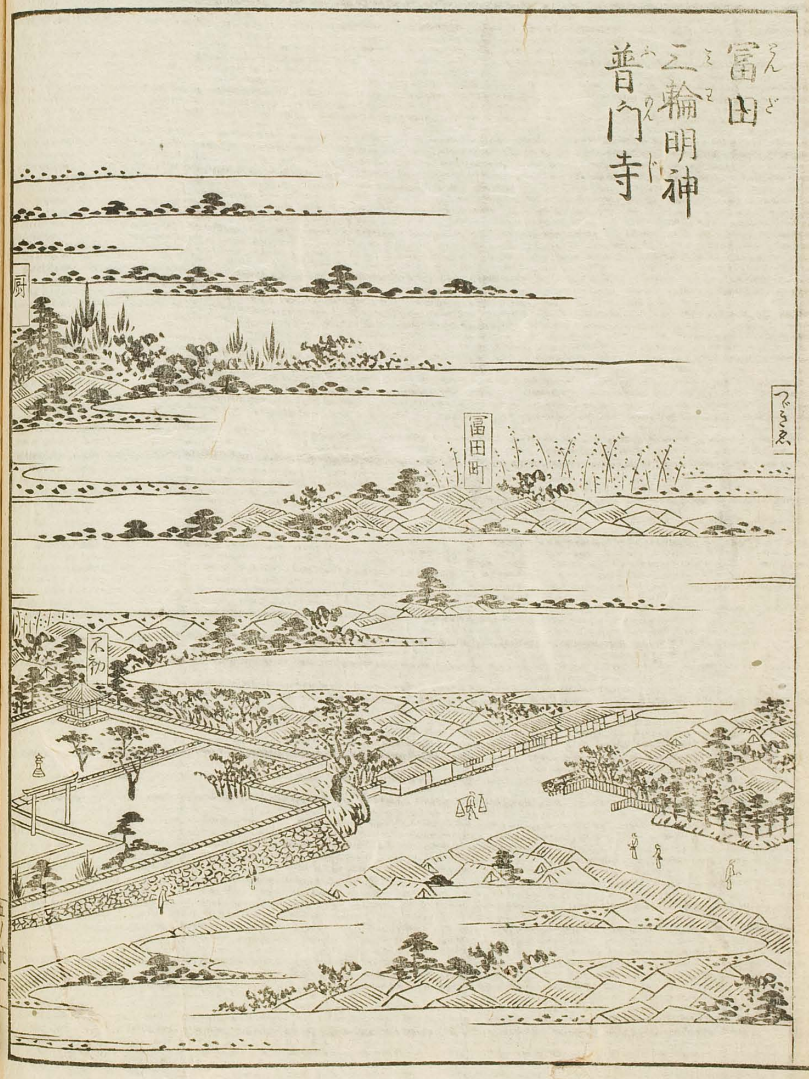
むと鶴の冨壽榮の松繁枝なりと云れる貴ぶ世の法 冷泉為村卿

それ当寺の開基は本願寺存如上人の考達式部卿正信房と母は近州親鸞聖人の城主佐々木巽禎の息右清門督義弼入道玄蕃の女と巽創の時存如上人より光照寺の號を賜ふ厨后蓮如上人純田の時まで上宿あり化益の消息巻に盡義感得の文を遺し給ふ本願寺十二代良如上人の連枝当寿院良教なり寺號し給ふ本山御坊高槻御堂を附與せられ光照寺改て本願寺の一字を冠し本照寺と號を迎き年冷泉為村卿當山寺勅に勅願あるべく宋版の持参弥陀の像を納め二部經を書寫し給ひ表書に祈願を悉記しくまなく寄附し其法筵を設けたまふ堂前の右松千尺に凌て蒼々たる松尺余ひ冨壽榮松と初て称し和歌を賜ふ


名木
冨春松
東西廿一間南北
十五間高十六間
書院
表門
冨春松
方丈
茶所

富田
本照寺
鼓楼

富田
三輪明神
普門寺



祥雲山慶瑞禪寺

禪堂本尊觀音

富田莊 禪宗 美濃國

赤梅檀香木 天竺毘首竭磨天の化膏ハ 浜水尾院の御念持佛ニ寛文五年當寺ニ附

觀自在

本尊頂の額 支那貴僧和尚筆

普應殿

二尾の檐の額 美濃源元筆

圓通

下の檐の額 美濃源元筆

雲行雨流 不動明王

禪堂の聯ハ 貴隱筆

槽憧至人翁與醒眼晴明日月 露柱の聯ハ 貴源筆

混淪皮袋子折翻鼻孔吼風雷

開山正統禪師塔

浜水尾院御建立 龍溪和尚塔銘

天光塔

靈元院法皇勅額

浜水尾院

附法の高僧 禪師の宸筆

枝桑第一枝

塔銘 源元筆

両額あり

開山塔の聯

○此外御墓塔の木牌あり 文ハ高泉の筆あり

木庵筆

帝澤宗風遠

光法眼明

方丈

浜水尾院御建立 額ハ源元筆

如意

書院の額ハ 源元筆

祥雲山

總門の額ハ 源元筆

濟道與時全身擔荷

總門の聯 高泉筆

祥雲現瑞通界輝煌

寺號日

當寺いわゆる景瑞寺と書し 持統天皇紀八年道照法師の開基ハ

法相宗ハ 年歴久遠なるを記録なく失に古人の語録世人口實なる禪とに道照法師の家司田部氏門おに住居し寺領農家の長なり其後挾向氏と改め家亡ぶ今其古墳なり 中に諸堂を火羅く唯一堆乃挾向と字しく門おに存に

松林のこと存せる文ハ應永年中松岩禪師中興して寺號に 東福寺の月泉和尚の疏語ハ時の人景瑞菴とよぶ寛正二年松岩禪師入寂の後文禄二年法地彈正が補長炬檢地の時古蹟ハ悉く除地ハ定ら所長ハ義應の住ひ後の茅菴なむとびく禪室を相續し明暦元年諸檀信の招請ハ奏して善門寺の龍溪和尚中興し又字ハ慶瑞寺と改名延宝二年初く美濃山萬福寺の末院と成龍溪和尚ハ 詔して本宗正統禪師の號ハ賜ひ尚山中興と称に拝龍溪和尚ハ慶安四年妙心寺ハ勅請あり又義應二年善門寺ハ再住に是年源元和尚明の乱ハ避く日本(濃)を崎陽ハ止宿に龍溪和尚いまゞ射頼もせざ所前ハ一首の詩を熱唫しく源元の德澤を慕ひ朝ハ奏し明暦元年源元と善門寺ハ請して奥禪の頼力益盛く拂ふ明暦二年 浜水尾上皇時々両師ハ召し禪法御聽受ひ せらる

則德山入門の沖制度の和尚を賜ふ寛文二年　台命を蒙て山州大和田莊小
黄檗山寺を創建し同年十月源元和尚進山あり是より黄檗派日本に
興隆す　按州小倉寺あり悉記る事　寛文四年小の迎列日世
正明寺小龍溪和尚進山し　太上皇の勅額を賜ふ同五年林丘寺宮
光子内親王沖受戒あり其時當寺方丈沖建営ありて沖翠篠沖紋幕
緇代茶奥沖寄附ある同七年丈　法皇沖閑倍あるせ龍溪和尚公
師とし沖傳法ある其時佛牙舎利沖香等拜ふ公賜ふ同八年
太上法皇宮中小ふく沖受戒あり　黄檗一宗の偏倍　天子の綸旨を受さなハ
龍溪和尚の傳法あるがゆへ當寺の住職
代々　後水尾法皇の　沖法系あり
沖法系あり
以地小六ヶ年止宿しゆへ黄檗進山の後二世木庵和尚小命せ當寺
尊者の勅言一紙あり其文小曰山小崇あり水小源あるの向あり故ニ
當山を黄檗一宗の崇源といふなり

構津州島上郡冨田莊祥雲山慶瑞禪寺開山
特賜大宗正統禪師龍谿大和尚御葬塔銘

其略云師姓佛國禪師支那高泉熏沐拜撰
禱佛始五歳忽病殂父母痛哭適有僧至其家問其家
詢其所以乃腰下灼艾少焉而蘇父母喜問其人生而多病父母常
名字住止僧不答去自是益信三宝尊八歳入
東寺習密教師之叔父見師氣宇超邁謂之曰
子乃宗門人胡淹滯乎此師即入攝州之普門
寺時年十六剃度納戒留意禪學越二年遊方
食風臥雪凡十五年遂讀雪竇語録極力參究
者又六年乃得慶快因謂衆曰我向來曾知道
不在文字上今日始知亦不離文字慶安四年
老　朝廷賜紫住鈔心寺承應三年再住嘗述川
尋　金剛頌評虛堂語録事義師恒欲踰海入唐
師　印可惜國有禁莫果所懷乙未歳隱元和
尚應化肥州適有僧至師問和尚有何言句僧
答近有偈云　挑雲入市無人買惱殺杖藜皈
去來　凡夫與衆食議請普門一見如稱
旨　契丁酉夏　得欣然召師入内殿問法奏對
九月　龍顔大悅賜法皇召師說法賜月輪檀香十州正明寺請四月
新黄檗甲辰正月將軍捨五頌德山入門便桙之歌戊戌
勅賜寺額乙巳十月藤大妃請師陞座説法是月
山資福寺二十山御園以爲禪苑御書天壽又
王宣戒法賜佛舍利塔輪檀觀音像初祖像御

牙御杖等明年三月師進天壽
平公賜御香白絹畫屏等法皇遺忠衆
幣十一月法皇問心經要新院上皇亦錫香
一卷戊申四月詔入大内親受菩薩大戒一口譚
解洞徹根源錫以大宗正統禪師之勅改所知
翰著請益録爲宗統録賜刊版流通併親聞上至
其以機奪機以毒攻毒何止削圓方竹杖之見得未
紫茸檀直得鉗鎚古今烹煅佛祖朕纖毫頓斷卻
大沽現成須彌高洋海不覺圓裹三世光
通徹大方始知佛心宗大而廣無外師實得其
正統者也又賜謝法乳之宸翰寛文十年四
月師領衆就正明坐夏蒙上慰問夏滿謝恩
旋省黄檗老和尚信宿而去八月十五日赴大
坂諸檀護請寓弟子拙道九島院先一日示衆
曰六根涉境那言滅心不隨緣豈謂生
踏轉涅槃眞正道歸程唱水調歌行
二日應有司齊是夜合府官從請師聞示法
要師高聲挙揚聳動羣聽次早有司遣使礼謝
忽暴雨驟至山海震動旋飆刮地巨浪翻天諸
從者促師逃避師曰生死敷矣其可逃乎汝等
端心正念可也生死之際當持正念胡顛倒乃爾如
是聲責之曰念生死之際當持正念胡顛倒乃爾如
是者責之乃索筆書偈曰

三十年前恨未消幾回受屈爛藤條
今晨怒氣向人噴一喝卻倒香江
八月潮

書已祕諸
坐水中夷然不動頂門如炙顔色如生四方縮
白張惶競至見師端坐疑其無恙即而視之已
蛻矣乃當空羅拜舉聲大哭如失怙恃實庚戌
八月廿三日也即日迎歸闍維干祥雲山聞至
法皇爲之嗟惜減御膳者數日特賜祭於内
殿嘗出内府金爲師造窣堵者三城州黄檗江
州正明攝州慶瑞覆以堂宇示尊嚴也且勅
毎歲諱日必就正明修法事嘗造師肖像入
供養然後始奉于塔上又賜經藏以鎮之

天神祠 慶燈寺の傳北ふあり此所の生土神なり例祭五月八日
延宝年中の再興なり（八慶燈寺の下馬堂とあり）

清水 示寂の地八坂獨壞嶺九峰院の下にあり
清峰氏の家にあり清峰氏の家にあり

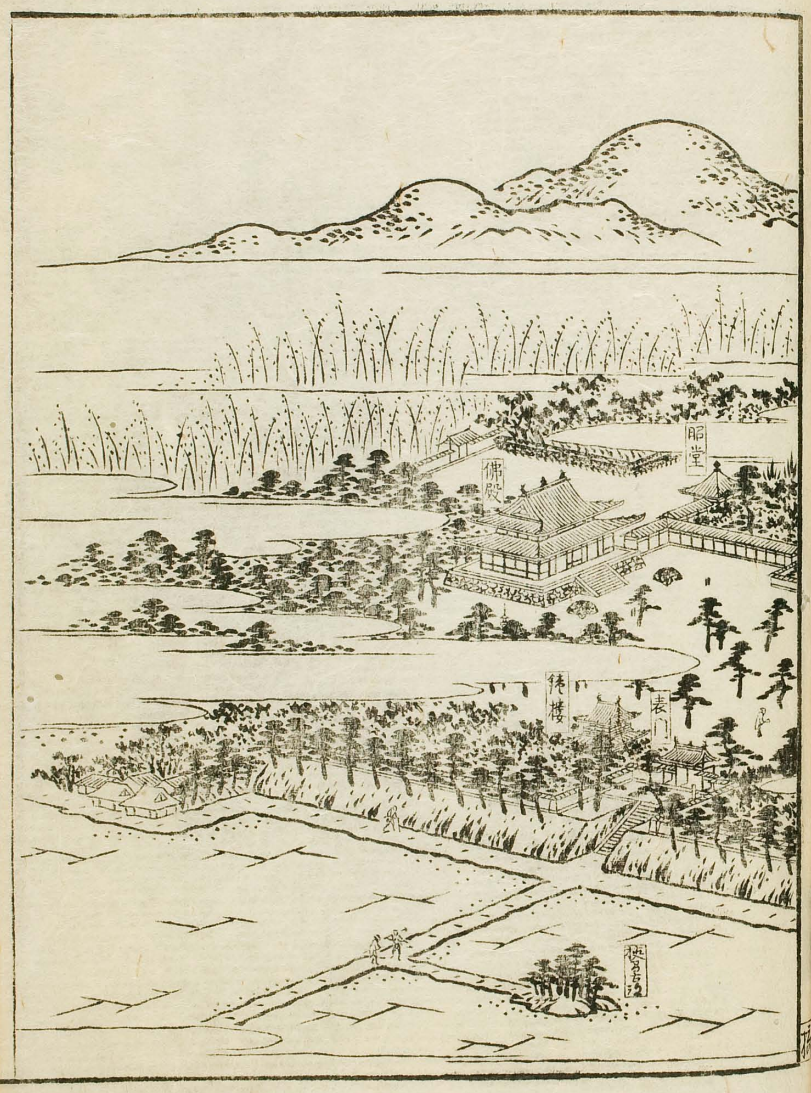
さくれ塚 是這上ふるしこの郎

小川もあるあるく流はく清あ小

おりくゆくまくまく通ふ志みゆうふ

尚白

尚今


眼堂
佛殿
佛樓
表門

富田
慶瑞寺
客殿
厨
天神社

教行寺　冨田小あり　東本願寺に属す
和州著尾教行寺の末寺

本尊阿弥陀佛　聖徳太子七高僧本山
蓮如上人の彫を安置
傳云文明年中蓮如上人此寺に立つ宗祖親鸞聖人著し給ふ教行
信證と書寫し給ふるの名とす

蓮如上人腰掛石　冨田東口永照寺の
境内にあり

二嶋鴨神社　二嶋江村にあり延喜式出雲國西面社本等の生土神なり
二嶋とは風土記云佐伯鴨神社は大山積命と姫波多津の宮御宰山神
百海國より渡来し給ひ此の國御嶋に坐しと云云当社いにしへ堤の
上にあり其時の標石今に社前にあり　所柔芦　当社の神殿に多し
文字磨滅して分明ならず　按るに川辺の芦に流れた
れく自然と所柔となる又其性公受く其立より所柔と生ずるもの
多し此地もむかしは川岸なれとも性公傳く今に所柔に生ずれ風土の奇なり
二嶋若宮祠　庫崎村にあり　祭神八幡菩薩

二嶋江　立位莊の内に古来和歌の名所なり
万葉
代々の勅撰に多し

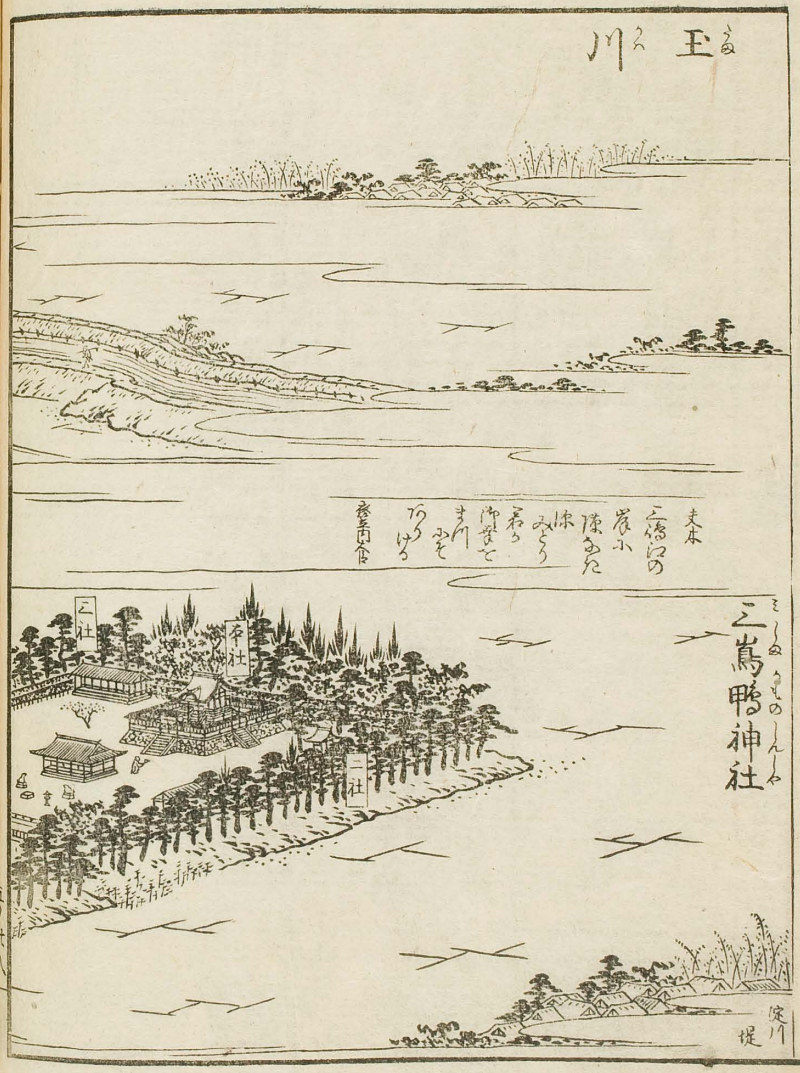
みしぬ江の入江はなほかりふかき君にあひてはなほ
拾遺　後撰
二嶋江の玉江の蘆分おりしらるおのゝ小舟をいまこそ
彰考　拾遺
こゝ淵江の入江はまこもあらしといく春ほれし州人もなし

彰勅
二嶋江の玉江はなほかりふかきに君にあひてはなほ
続古　後撰
友鶴のむれとかしこしとむしろ二嶋かたれの春の夕のそなく
続後撰　続後拾
みしぬ江の入江小ぶる白菅の春ぬ人ともなひ足つるかな
続後拾　基俊
あし芦のかれ葉もさわふみしぬえや氷のうへに浦風ぞふく
新拾遺　為道朝臣
みしぬ江の芦の葉かたれ義孝とこに生く夏の秋の夜れ月
新續古　津守國道
さてもまた人をたのこ浦波ぬみしぬかたれのあはのいさり火
後拾遺　正二位家隆
又しぬ江小ぶのこみかりる芦の根れ一よのほとに長めたかり
洞院　好忠
長歌ゝとめるかりるほの國のなれみしぬ江のかり成らん
文本　為兼卿
みしぬえに真菅のあくやりえめしぬ友ゝ弱のかりそ春ゝも
小侍従
二嶋江浦　二嶋江とは文本集拾遺國又二嶋浦と許い
伊勢肥後の國にあり
文本
風吹は花咲ぬるのくるさひに橋見とおもみしぬ江乃浦　西行
日
住吉の松もみなれにあり名とこゝめつゝしく二嶋江の浦　小弁

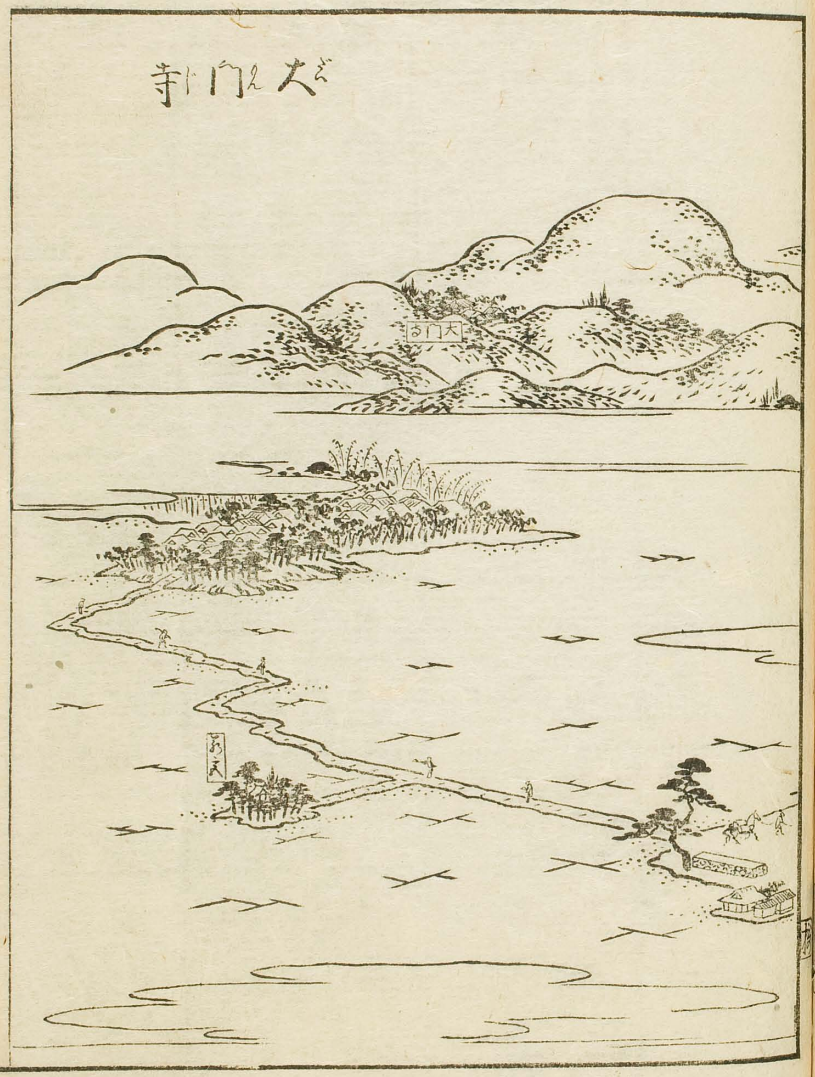
玉江　二嶋江の一名なり又東生郡小椋村に玉江の旧跡あり是れ　仁德帝の御宇
菖蒲とまりし地なり今田畠となる和奇たより聞てこれを知るべし

千載　みとりふ芦の若葉やりへぬらん玉江の浪成わさ為長駒　清輔
金葉　八月雨ふる江の水や増さるらん芦の下葉のかくれゆく頃　俊成
新古　菱川の芦れゆく秋も長あり玉江の月乃明ゆくこの夜　秩父院入道内大臣
新後拾古　月に秋も暮ゆく定めぬ白露の玉江の芦ふ浦風吹　後鳥羽院御製
文保　菱ゆく成や玉江の水にむもれてくゝんゆゝぬ屋の夕きこゑ
家集　ゆくやその蛍れ数ゆ秋も玉江の芦れ月へぬ葉そ為た　頼政
ゆれ出こ信江をあふ淀川の流と帯く経波ゆく京師ゆ通へ紅
あるとなく益と野く樽柏ふ有瀧ひくさ一ゆにあり雲るあり
引舟の徳長くあるへ徳縄く鉄車ふ如ゆ者涼しくあたつ也信
ゆ之の足並柳ふ月と芦間の蛍乱ゆ〻ゆ〻と時鳥の一聲た
月信ゆ〻ゆ流水溶ゆ〻ゆ〻ゆ風凛ゆ〻ゆ舟ゆ〻ゆ紅ふ酒
清る聲驚忽ゆ〻て人々驚ふ貴ゆに初屋の川ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ
ゆ〻者ゆ〻さ歌みふ信江の風流ゆ〻て信ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ

玉川　信江のあの方　西村田畔の中ふあり　名所六ツ玉川乃其一　土人云中秋の月ふ流水ふ月る時ゆ其新こゆた見ゆると　萩
和名抄ゆ玉川の里ふ多く詠ゆ歌ゆ　氷柱　氷　ゆ〻れゆと詠合せ
風雅　時雨ぬ里ゆ玉川ゆ月とゆ夜の埴ゆとゆ月む白露　定家
後拾　見ゆ〻ゆ波の柵ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ卯花咲る玉川社里　相模
千載　松風の若ふ秋ゆ〻ゆ〻ふ夜ゆ月ゆ玉川の里　後頼
日　氷柱ゆ〻ゆみゆる秋ゆ〻ふ玉ふ今や玉川の水　崇徳院
日　月ゆゆる氷ゆ〻ふ霜ゆ〻ゆ〻ゆ〻ふ玉川ゆ〻ゆ〻ゆ　後成
新勅　ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ波ふ有ゆ〻ふ菱夜ゆ〻ゆ埴ゆの玉川の里　花園院
後拾　白ゆの夜ゆ月ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ時ゆ卯月の玉川ゆ〻ゆ　家隆
千載　玉川と若ふ宇〻ゆ卯ゆ若ふ霜ゆ〻ゆ若ふ〻ゆ有ゆ〻ゆ　仁和後法親王
玉葉　卯の若ふ霜ふ光ゆ〻ゆ〻ゆ月にゆ〻ゆ玉川の里　為教
松永久秀故居　東五百住村　鴨神祠　赤小路村ふあり　生土神ゆ
例祭十一月朔日
津江藥師　津江村ふあり　本尊ふ形基の作ゆ霊験ゆて毎月
八日十二日近郷ゆ群詣ゆ


玉川
二社
本社
一社
淀川堤

落月や
水ゆく
小枝哉
東山
南更
玉川


大門寺
大門寺

霊山寺
服部社
霊山寺
手社

氷室古蹟　氷室村ふあり　氷を藏ス　所ろく　窟二つあり　廊七百余歩　土人氷室塚と云　氷室の事初養に見へ

八十塚　塚系村ふあり　数の多きふよりの名ふ呼ん　安園寺塚　塚脇村ふあり由　詳不詳　又園本村ふもあり　遇ふ古墳多し

帶仕山　郡家村ふあり　山の形ち帶のゆし故ふ名くに　一本木塚　郡家村市野ふあり　家上ふ大樹一本あり

阿武山　奈佐系村の北ふあり　今城塚　郡家村ふあり　仁正永祿年中城営くに　姓氏不詳

靈山寺　室山ふ村の上ふあり　鷲林山と号に　真言宗

本尊石像不動尊　室巻九ひ三月十六日開成皇子感得の名容く　巍々そうう　天正年中　高さ五ふ　兵火ふ灰燼とあり　其附の守傍黄檀　弘清作　本尊公員をつく　冊波国ふ流ち　世孫つく　後再び草舎公　雲くく今のゆし　零落荒廢に及ぶとなくも　麦ものの利生日々に新みしく　一言神ふ射い意願　発ぶとなく半ある　故ふ今一言不動ると称に

石標　室山ふ村入口ふあり　鐫曰一言不動　林山靈山寺　寶暦七年　茶次丁丑秋九月　嶺州流士龍謹書　崎陽藏館

當山第十世現住本瑞覚峯

十界助縁　敬立

神服神社　姓氏録云　服部連　速日命十二世　麻羅宿禰の後あり　允恭帝の御時　紀氏　服部司ふ任し

諸国縁起　服部公　恐縁に

名春服部煙草　服部村ふうり出る　莖細く葉色よく香造く　茎しく芳し　濃ものみる服部公名くし　諸国へ出に

南山安園寺般若院　服部村ふあり　天台宗　坊舎六區

如意輪ハ祢ひのすくにめうきそ弟公やを器のるふおうそや　名垂顕氏成郷

本尊如意輪観音　開成皇子の作　脇士左不動　右昆沙門天　運慶の作　弘法大師の作

阿弥陀堂　本堂のあり　開山堂　本願開成皇子の尊子

般若塔　本堂の上ふあり　開基禪師一宇一石の大般若塔公　書寫しまくに藏む

鎮守祠　八幡　天照太神　春日　住吉　山王　天満宮　弁天　稲荷　大將軍

みの月のそうめはの國南山安園寺ふ行る　般若院とて傍のふ流りうく　後日　あそひなやしくふ布のさ流里やく公　祢とさひしきうとる流ふくる世を　なるまをきうんやうあくをる流ふいつくるん　所にそをといとうくやは流しく覧多

うに年もよ布にみをを九ふあくを練世にををみやをを器のべのる

水垂顕　菓豊郷

其山　遊南山般若院記　神山元政

山開成皇子之所開　雖不高遠　聚落幽僻　可欣　名曰南安岡寺　歴荒廢今存者　僧舎四焉　頃日新堂安如意輪大悲像乃皇子所刻也　多聞天在其右　不動尊在其左　皆彫刻巧妙也　山上高處

有石塔一僧指之曰是皇子藏石經般若之處其經每石一字天童聚石皇子新書余脫屣而進顧謂僧曰此許迴垣使人無蹈可乎僧曰然山下樵子亦能知之不敢徑一踐但爲外客未能知者爲之苟善矣山上一望捕之山水如畫只憾無一亭榭人可遊眺耳僧延而入一坊壁掛十六羅漢畫而憾未乾而曝之僧曰近令書多舊物且爲曝之俱新問之耶余窃笑之曰日之荒寒者多矣此僧之苦薩莊麗端嚴僧之一堂潔淨無塵安虛空藏菩薩莊嚴端嚴僧之是菅丞相所造也余就求靈寶及緣起五僧乃多展畫像其中不動像最奇古也五色錐漸落神彩逼人僧曰智證大師之筆也聖德太子像亦奇也又有三千佛名經一日禮僧千佛至今爲式已而余繪緣起坐客側聽日影已斜余疾一舌讀之八百餘年之事須臾之間量讀了

揖僧而出指僧良盛也

南山幽邃四無隣堂閣高安如意輪林下

題寛文壬寅十月廿一日　元政

逢僧訪遺跡坊中延客慰吟身三千諸佛前回首

禮來久十六應真畫得新般若塔前回首

看色空色絶風塵

服部古城

服部村ふあり　ねぶ　永久秀これを築く

古詠今あり　在に

安正寺

真上村ふあり　本尊千手観音

傳云仏基の作

堂おふ梅の古木あり　梅渡四時青くして蕊ひらく故ふ世人まち梅の観音と称に

古木い枯く其實ふ植樓して後堂ふあり　尚寺の釋書ふ出

元亨釋書

笠森稲荷の祠

真上村ふあり　世人瘡神と称し土の團ふ供し

瘡毒ふ瘡をの遠近のの西ふ延喜式に出ふ稲荷社

あり　世人隼ふ稲ふ　平瘡と称し又小兒及び瘡疾に苦しむもの多く

祈願に神を信敬にくれ利生あり一心の懇祈した願ふ

再祈　感應空しからんや

笠と瘡ふ

ぐさふ　ふ利生あり雨霧ををさめ神の恵ふ

荻川

拾遺　斑竹

ふ係山州乙訓郡外畑の山中より出本郡原村に至て本山溪と合し

服部荻川を経て竜崎に至て淀川に入荻川村驛路あり

人ふく荻川てふ川の國れ郡ふ出たのえ出ふ発あり

兼香殿中納言

金葉

ふの國れ出ふやう人を荻川若ふそはふた頼くふ人しう

漢人

夫木

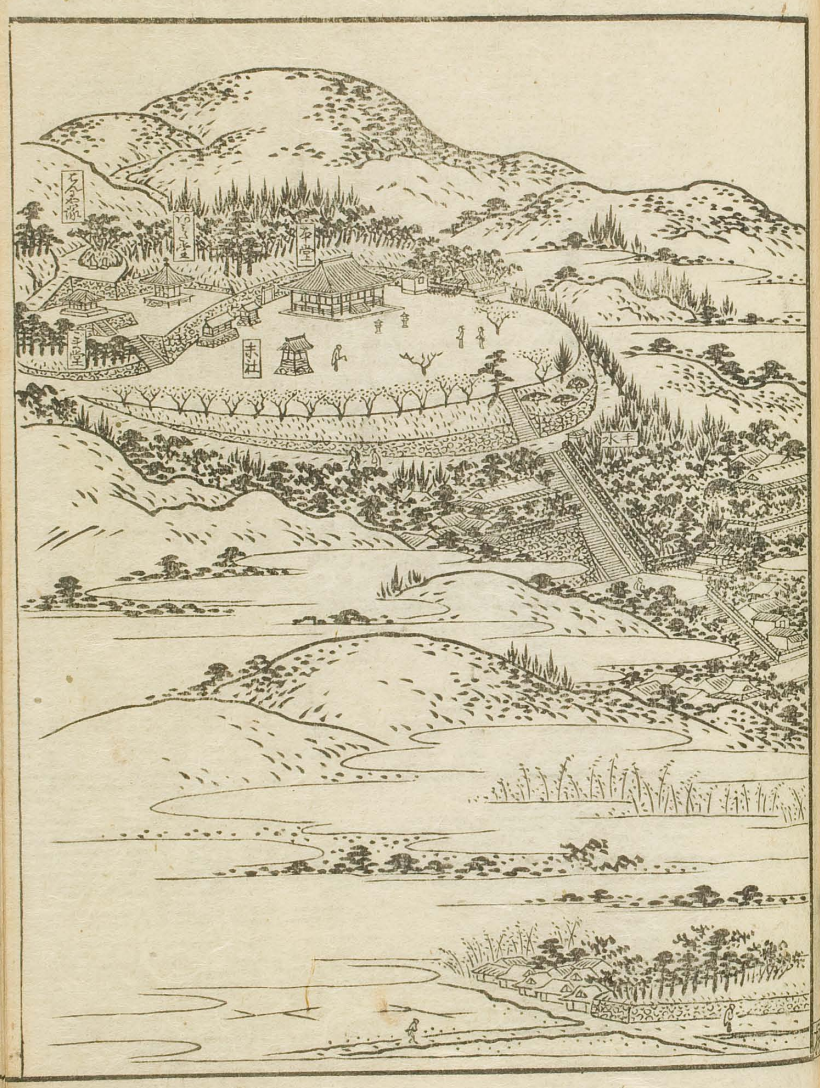
花もまと義ぬる果の荻川うくぬ波手去袖ぬふ

為顕

日

たつふも若ふみしぬのあて川あくふ人の若ふもせぬ

伊勢



南山安国寺（なんざんあんこくじ）

青梅成
斑牛

安正寺
青梅市
青梅

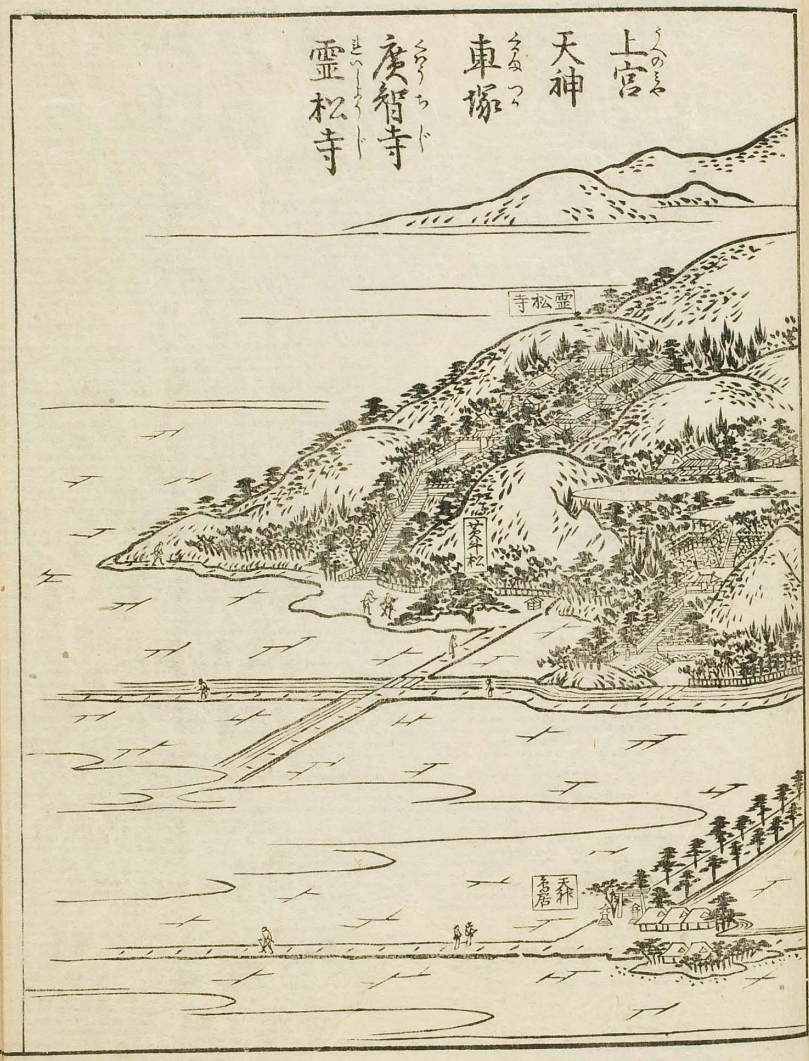
本社

真上
笠象
稲荷の社
世小
疱神と
謬る

伊勢国名所云

むかしこのあたりに女の子ありけり年ごろ経てよひとりなりけるを
なりはひにとて東の方へいとりけるに
ふかくいりぬれば草のうへにかりをしたりけるを
あるときにふとひとりなる
あくとのしんじゃ　荻川村にあり延喜式出雲村の生土神なり今住吉明神と称す
阿久刀神社　荻川村に相通ず
荻川古城　荻川村に古城あり貞和年間安濃郡荻川右馬允なる者居し
長則ありて相模に希安と細川憲国に殺され長則の婢の百万遍寺に
自殺に及ぶ孫十郎なる者細川憲国に擬る文安二年八月長慶寺に逃
孫次郎儀興成して右馬允を殺しむ細川六郎
山城守なる者小擬る今山城頃国と称す　荻川村の小ふあり
黄牛山霊松寺　禅宗曹洞
布尊正観音　行基の作　中興無月和尚
岩寺初め僧正行基の開創なり地蔵院と号す文和延文の比伽藍破壊
建ず　後小松院御宇無月妙應禅師なる者古松に光明禅寺を
乃ち其光の根を掘るに金像の大悲観音を得たり布これを頭上に

古名郡
能因法師墳
伊勢寺
菊の井
能因塚
菊の井
ちせい


上宮
天神
東塚
廣稙寺
霊松寺
霊松寺
茅葺松
天神社

大神社
廣稙寺
東塚
天満橋
松茅葺

籠布尊と〜壷松すと改むゝ時應永十九年に當るとう其後永祿元年
正親町院の勅願所と成同二年八月廿四日綸旨ゝ賜ゝ三好筑前守義興
土岐山城守定吉大檀那とする則ち有るゝの墳墓也ゝ有る年毎正五九月
天下安泰　寶祚延長の祈禱ゝして大般若經轉讀あるゝ
什寶　光明皇后御真筆の般若經半卷あり　兆殿司自畫の十六羅漢同
軍令の下知狀　第外松　此寺門ゝ有る山号ゝ出る觀音の像出現
等あり
袈裟懸池　袈裟を懸ゝ上田邑村ゝあり
墨華山廣智禪寺　禪宗美濃風
本尊十一面觀音　聖德太子御作也ゝ開祖ゝ上宮太子ゝ上古ゝ諸堂巍々
たり天正の兵火ゝ罹ゝ荒廢ゝ
中興正統龍溪禪師　禪師の才ゝ獨量和尚相繼ゝ佛殿ゝ宮むゝ後
禪師住山ゝて方丈鐘樓ゝ建立ゝ改ゝ又
ゝ禪師ゝ後の　鎮る寺財ゝ　弘法大師の　二ノ歷池　表門ゝ掲る額ゝ
中祖ゝ
慈恩堂　佛殿の額　表元和尚の筆
秀通　ゝ所ゝ掲る　表元の筆
什寶觀音　愛相圖二千九幅　土佐藩例筆　歷世禪祖圖二十幅
巻文呂瀬千鶴両筆

上宮大神祠　上田邑荘の上方ゝあり此地の生土神ゝ成例系加明台社領ゝ春松院と
〜ゝ時野身郷高月の領主近義遠忠範ゝ家ゝ一益秀吉ゝ
其古跡ゝ有るゝに紀ゝ
野見宿禰ゝ祭ゝ有るゝ織田信長寺社を破御の時大滿宮と改ゝ
ものゝ中ゝ此地に車塚ゝ有るゝ人ゝ墓東塚ゝ
又去松院ゝ石燈籠あり古代の形ゝ
野身神社　當社記ゝ
檀神木　高塊坂向ゝ有る　諸云神武天皇此樹の下に陣ゝ東征ゝ此祥瑞ゝ
谷山塚松　王川のゝ有る淀川堤の西ゝ笠の形ゝ大樹ゝ土俗ゝ南方の武ゝ
谷山右馬助宣高の墓ゝ
象王山伊勢寺　古名郡村ゝ有る此所ゝ伊勢御の奮源ゝ
寺ゝ院統合の間ゝ
又ゝ人ゝ有る山里の獨居ゝ
本尊正觀世音　慈覺大師作　伊勢御古墳　佛殿の西ゝ
什寶　古硯一面　伊勢御の所ゝ立ゝ
食の形ゝ　硯管　靜見庵画の模様
陶器明の彫刻ゝ　古雅ゝ
伊勢御画影　讃ゝ古今の和歌ゝ　伊勢寺記一冊　源州元政筆
寺記云　伊勢寺ゝ伊勢の御の旧棲ゝ後ゝ寺ゝ人ゝ開祖ゝ祥忌

毎年十一月廿一日に必ず法筵を設け伊勢の御八幡に献伊勢の御八幡冠九世孫
式部大丞兼木工頭藤原継蔭が女と又継蔭は伊勢大和薩摩隠岐等
の任に補せられ経歴に当る伊勢守たりし時なりと云ふ誕生の時伊勢と呼ん
宇多帝東宮に侍し時御母胤子と成り絶世の美女なりと和歌を善し
名歌多くあり敦慈に嫁る事あまたびん便伊勢地沿伊勢集
あり世に流る　宇多帝崩じ給て後ち小源遺幽棲して終に
出ることなく其ころ門室を伊勢と呼けり星霜果る頃天正の
乱に堂宇旧記一切焼燼と成る元和元年祖永和尚中興の力に奮ち
松を栽竹を植て伊勢の祠堂を造り古鏡を廟中に寄る時の人みな
あるいとたかき高欄の城主永井日向候大江直清羅山子を以て伊勢が
廟碑を撰し給碑碣に廟上に建て不朽の勝蹟をきわめ給
しかり　伊勢物語の紀古本より分明あるに一説業平の従兄とそ又賀茂の馬周が説
出伊勢とも傳言て業平と寄女伊勢の所の書ゆゑ一説あるべしそ
名ふもの山伊勢ちの人者の上れ遊ひとあん
厚ひ通はゆひく山に望に向居に出居給ふ

身内ちうゆひ一ぬる紀にあれをあや結文
たつと語伝りて
志ゆく人は玉の蔵もいとひて学に成ぬふかしに成ぬ　同上海門縁本要
字一ゆゆ一絵姿を見行りて
うれし絵ふるかもむしの志のたれて紀はもの人ふあるかちそう　同
紀国法師墳　古名郷村ふあり　碑碣林道春題に
碑碣林道春題に　法師の国古名郷と云て不ふて後る
後拾遺
我宿の梅は夏ふるとそ見る生駒山を見へにけりなる　紀国法師
射馬ふふありてはりくるふはの国れをり
紀国法師作りくへつりて家内
13
命あるそ今ゆりまんはの国は疑波堀江のあしのうら葉ふ　大江嘉言
大江嘉言射馬ふふありてはりそ羅波堀江の
あしのうら葉おとろみて下待り家はやそ
国ふくふ成ふるときくそ
勅撰
あもれ人々の命ふ志ゆまは疑波のあふ葉ふ　紀国法師

碑銘　羅山子
能因法師者尤大臣橘諸兄十代之孫也
本名永愷父曰肥後守元愷永愷補文章
生弼肥後進士後遁世改名能因弼古曾
部入道善和歌此道昔無師弟至能因初
以長能為師果然否嘗有秋風白河関之
詞世以為美談兵部太輔大江公資五条

東洞院宅庭有大櫻樹毎年能因自古曾部入洛往玩其花花亦依人而其名彌顯後冷泉院永兼四年禁裏歌合時能因献和歌有三室山楓竜田川錦之句不亦栄乎其餘詠歌繁多不可枚挙也摂州高槻城邊有其舊跡今畧書其姓名以傳于後世云

慶安三年春三月　日

日向守大江姓永井氏直清置

花之井　別所村ふあり清泉宅暑ふ洞に傳ふ碑銘あり慶滅しく足へに或日一名山下水といふことを古号郡入道れ和河ふ傳名

新古今

ながらの山下水に新月をまちてすむ白砂ふかれ老にけり　後鳥羽法皇

高槻城　古高月と書に地名野身郷高月邑とい社園の時きに本の槻ありな陣と定られしよう槻の字ふ改城主初ハ近藤速といふ代高月殿と称に十二代の後八左近の時没落に其後和田伊賀守高山右近居城しえ和年中に土岐山城守松平紀伊守居しー寛永十三年より岡部弟濃守松平右京大夫慶安元年より永井庆居城を

野身神社　当城内ふあり延喜式内今牛頭天皇と称に武所の生土神と云倒系九月十四日

大塚殿　大塚村ふあり実八王塚と其姓名詳ならに今生土神の御旅所とに

磯鳴　淀川の東ふあり鶴殿道西ふ向つて九て橋ふの男ハ淀河公限る

鶴殿蘆　世ふ名高く貢ふ献るなり

冠柳　冠村ふむり柳の梢冠の形ふ似る名木あり今枯くかし

鶴殿　鶴殿村の堤ふ出る蘆と葦葉の義背ふ可しくむりより

土佐日記云

と青うやのといふとを為ふ泊ふ云云

春日神祠　東天川村ふあり郡田若宮の生土神と云

上牧神祠　上牧村ふあり鶴殿井尻の生土神と云

上御牧同跡　上牧村ふあり

中御牧　枚方村ふあり共ふ延喜式出

三牧橋　茨川村の小街道ふ渡る石橋と土人云むり

檜尾川　茨川村の小ふあり一名七瀬川あ係大澤山より出く成合安瀬

鏡井　上郷下村ふあり

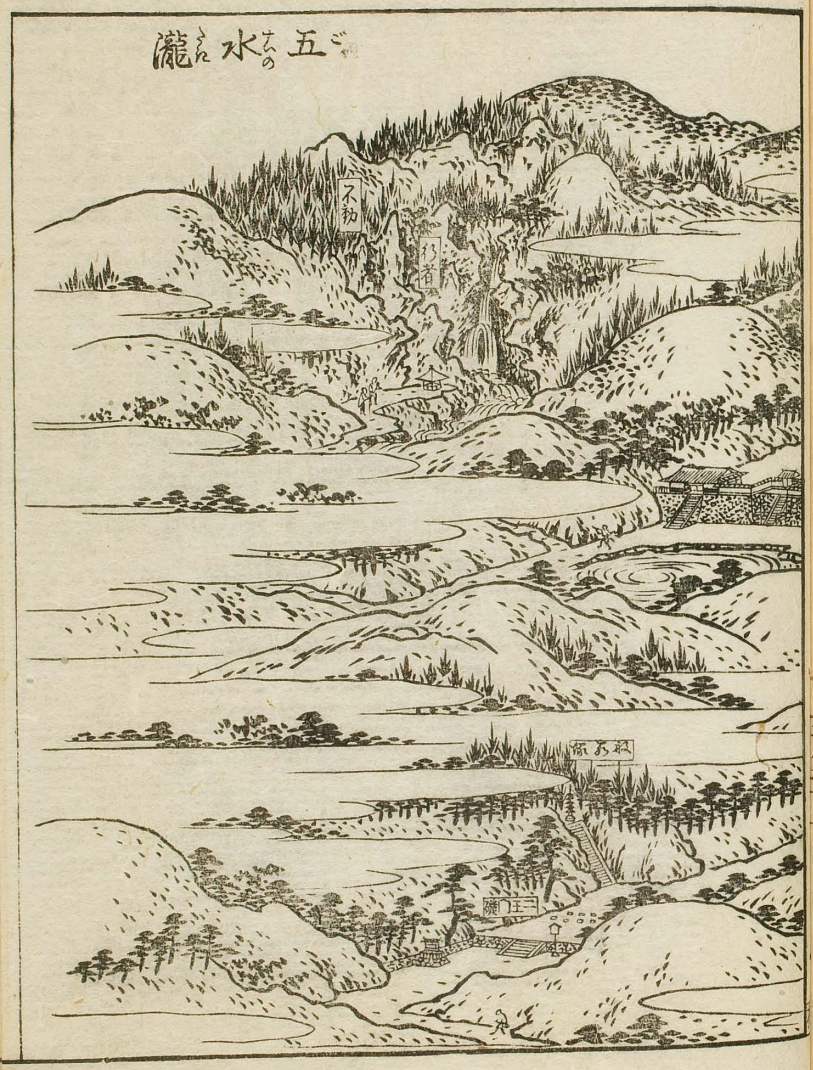
妙法塚　ハ村ふ

小井　ハ村ふあり鏡の井と共ふ清泉と

大澤山　大澤村の上方をいふ山岳横溪谷長し

旗立峠　大澤村の後ふあり丹波国田辺村へ出る所縛に

赤松入道　圓心ちに毛し旗を麗しくなる


五の水の瀧
不動
行者
祈願所
滝門

久本山寺
人約石
本堂
ちんす
表門

原山　原村の上方にあり山脚神峯寺嶽より続く山林繁多し
眞神宿禰と称し代々炭を製し姓氏録云　摂津國諸蕃原ノ首
福王の後あり　名寄

原山の片やの原れ水より始し小谷の若草へ時ぬ此秋を　洛家

原の池　原山の麓にあり　後拾遺

むえ玉れ秋をへく氷る原の池い春とやもかゝ波も立へた　義孝卷

六帖

たゝの池ふせゝる玉藻のかりそめ若草ゝ春あかくふ　貫之

夫木

むゝしゝ春く氷やちゝれ若れの色ぬふはゝく原の池水　信實

は

ちゝ若はゝく陸ゆた原の池ふかゝゝぬれの秋まのゝきゝふ　後拾遺

堀川

冬寒ゝ春をゝく原の池もよふむゝにほる氷あり久ゝ　仲実

萩谷神祠　萩谷村にあり基因の神と称に社内ふ大岩あり　岩神と崇く祭祀に

北山本山寺壺雲院　原村の上方にあり天台宗　安置寺の南山に對に

本尊昆沙門天　役行者の作也弘法大師脇士左右祥天女右禪賦毒多

俱ふ行役行者の作

開山堂　本堂の東にあり役行者の安に額役僊窟　慶嶽安樂院眞教筆

鎮守　稲荷　白山　蔵王　本堂の後五町許ふあり臥虎の形ゝく　虎石　本堂の中にあり　大弘法大師色彩

五水瀧　本堂の後五丈許飛泉瑞珠の如く　時瀧水五色に見えるゝ名とゝ　毎年春の彼岸に天下安全の護摩修行あり

忍恵上人旧菴　方丈の南にあり此菴より南方に海を遥に遠船邈ふ見えゝ　天狗岩　當山の絶頂　赤土阪　當山の西の麓

神峯寺嶽　當山より廿町許小にあり山州若峯寺の山路あり　鐘銘　松花堂の　虹梁　本山寺造営慶長八年三月日

北山の額　豊臣秀頼卿御願所　一箇に長田友南筆　一箇に慶澤筆　本山寺額　慶澤筆

文當山に　文武帝元年役小角和州葛城の峯に若修練りし

狂に時邈ふ此峯に當ゝ五彩の瑞雲たなびくと見ひられを見ゝ

ちゝふ至ゝ見ゝ山川の幽邃ふ載の奇樹繁茂し怪岩雲石嵩く聳

ゝ崑崙の王を列ひる此を見ひられ神僊の棲地ゝゝ居所ト

見ゝ所ふ忽ち谷初揺して昆沙門天出現し見ひ昇大悲の誓約成

舒ひ末代帰依の院生ふ速ふ十種の福禄を願へ奉り寛
行者歓喜して昂自尊容を刻み尚願に安置しまへ是本邦
二昆沙門の其一也 山州鞍馬 和州信貴 厩戸聞成皇子御年四十二歳の時竊ふ
宮中を出ひ弥勒寺の若仲若麻呂を師とし出家し寶亀五年
六月役行者の德行を慕せひ尚山の遺流を訪ふ堂舎を建
立し大般若経を一字一石ふ書寫しひとち小蔵めひ跡
今ふ存せり又精舎の後ふ瀑布あり行者ふ修法しひ附瀧水
変して五色となる故ふ其名あり諸疾を此瀧ふ浴をれい治せりとい
事かし大治年中山の禁ふ橋輔元といふ武士あり父子癩を疾
一七日此瀧ふ浴をもて速ふ平癒せり父子大ふ歓び財産を喜捨しく
堂塔を修造し遂ふ魚山 山州大原 の良忍上人ふ投じて父子共ふ出家し
名を良恵忍恵と號に 近衛帝詔を降して忍恵を以て當山
十八世とし良恵を塔内ふ葬を施び以て融通念佛の法脈を継ぐ

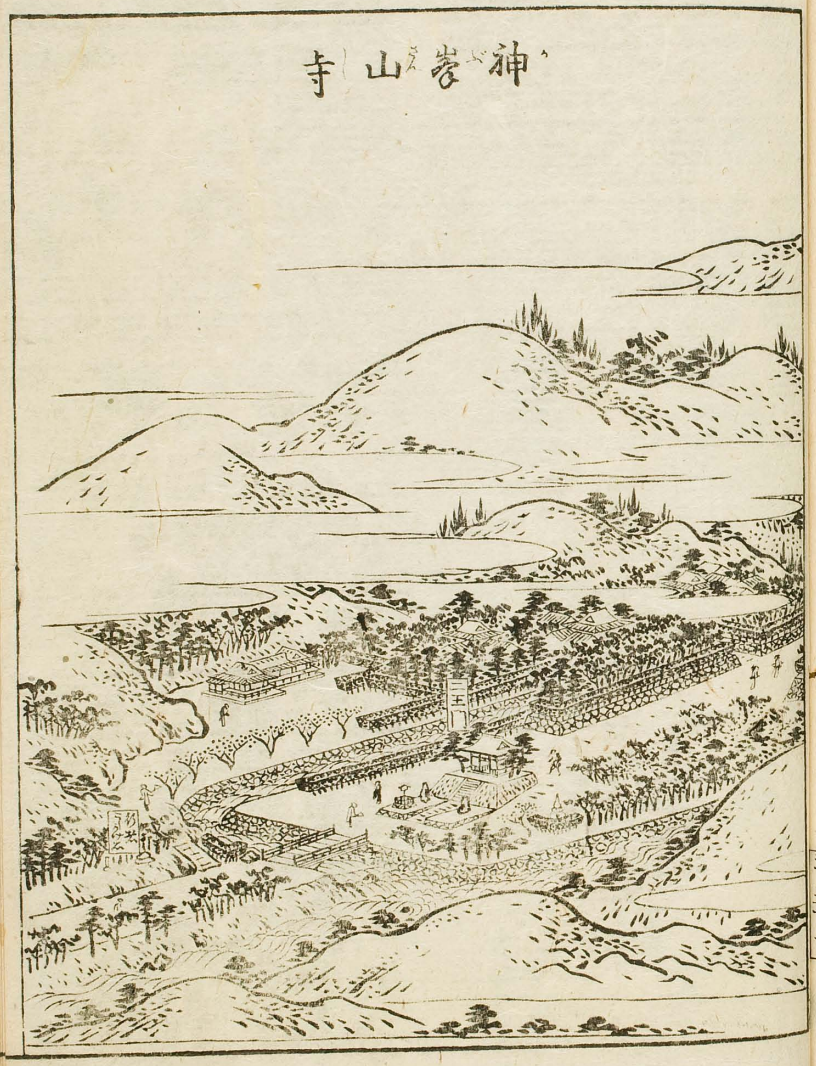
佛号の数を唱るとき赤小豆を以てし其孫と菴の傍に植しとい
其後今ふ土の色赤し人呼んで小豆阪とい是霊験ありて天正の比
る山右近ふ為ふ寇大し諸堂一時ふ灰燼とする慶長年中内大臣
豊臣秀頼公御建営ふ成し厩戸又一位藤大夫人桂昌院殿再建
修補あせられ國家鎮護の深利と成り ふ内 寺號 已上
什寶 蒲萄硯 硯面ふ蒲萄の彫あり 初ハ足利東山殿所持 長一尺弐寸八分巾七寸八分
盆石 石の形を以て名とし
伺向鳶石 高サ四寸 横九寸
此二品ハ天文の比松永彈正弼久秀當郡東五百住に在城し當山
昆沙門天を為ふ帰依し霊験を蒙り武門の名誉を上ふ
庄園を寄附し什寶の二品を奉収せり

摂州嶋上郡本山寺有二奇石一往昔松永氏霜臺所寄附之一盆石也厥形似鴻鳶落
沙頭ニ欽倦翼瞻因レ之名鳶石矣現住厳鎮
法印就干予請記之仍賦一絶贈レ之云
一箇堅頑娛有レ餘恰如鴻鳶在平沙
床頭相對四時好殘喜春來不レ背レ花
紫阜野釋蘿月子書之

松平豊後候資訓寄附

昆沙門天曼陀羅二幅對向眼妙法院尭延法親王

神峯山寺



根本山神峯山寺宝塔院　大澤村の上方ふあり　天台宗　坊舎七區

本尊毘沙門天　役行者作長八尺脇士九右祥天安右禪臓童子　又大日如来文殊尊梵天帝釋等ハ安ニ倶ふ切基の作

開山堂　役行者安ニ　観音堂　和州名谷ゟ観音と同体同作ふり　阿弥陀堂　二王門の外ふあり　慈覚大師の作

光仁天皇塔　開成皇子の御父ゟ天應元年十二月廿二日崩ゝ御人皇子御墓堤のため小十三層石塔圖を建られしゟ

鎮守　山王　稲荷　金比羅　役行者笈掛石　二王門の南ふあり　二王石　二王門の傍ふあり　高七尺余

二王門　竹内良尚法親王筆　金剛力士ハ安ニ額根本山　九頭龍　絶藏の東ふあり

明王嶽　本堂ゟ巽ふあり　什寶　破五鉢　役行者の所持

それ此寺ハ役行者の開創ゟ開成皇子の中興ゟ　文武帝元年日本高山の中　拾茅ヶ日　北嶽山　北良嶽　伊吹山　神峯山の嶺ふ　愛宕山　金峯山　葛城　富山ゟ

玉ゟ四方の出溪を尺多ゟ南方ふ溪水所瀝ゟして此来の梵宮ハ伝ハ賢聖新向の聖區あり今の九頭龍新向松ゟ其瀧の側ゟり

金毘羅童子出現ゟ七日豊葦原開闢ゟり已来此山ふ住ニ疾くあに梵宮ハ此ゟ三ゟ可あゝんと告る行者昇明王嶽ふ至り

藍婆毘藍婆の二鬼ふ聖本ハ授ゟ毘沙門の像ハ作ゟ岩上に安置ゟ其時虚空ゟり蔵王の二神紫雲の中ゟり出現ハあゝ胎蔵界金剛界の密法ハ行ひ給ふ此行者天竺の二石ハ立置給ふ熱門の二王石ゟれ其後開成皇子もあに来りて中興ゟ又摂輔えゟ雖治の病も九頭龍ふ浴ゟして忽平癒を則出家ゟ大原山ハ良忍上人を師ゟ浄土宗と名乗融通念仏の切者と成阿字ゟ谷ふ居ハ結び廿一年の間称名怠ゟ往生ハ遂ふゟり元久元年黒谷の源空上人當山ふ詣ゟ浄土上人の墳おふ至り当宗念仏を宣聖ふ唱給ゟ塚の中ゟり正ゟ十念の聖を継ゟを云伝ふゟ　已上寺記又伽藍開基記の大意

ハ敬る初ゟ本山寺の縁記と相ゟり

所吉類あり別記にあり

安蒲神祠　成合社ふあり去日吸神と称ハ毎年正月十四日粥を煮て神供とし管三本ふ早稲神稲晩稲と記ハ村民往頭に會ゟ粥ハ煮て釜入共に煮汁其粥管の中に入る分量の多少ハ分く豊凶を占ふ是の所の風俗ゟり

盤子杜 安備祠の神籬とす 盤子故宮 日村ふあり 宝物殿 後鳥羽院ゆかりの宮しゆへとも 或日

続千載

わくゆくたふとそれ杜の風ふきそめしより池くんとのそもるし 正三位為家

日

思ふてもいそのそのもりは紅葉ゆふ君のゆきをかけし也 津守國基

日

たひらのゆかひとかふるたに人ふいそのそのもりは古あれて 茶中納言為方

続古

春ふかしも秋と考ふ清水の國はいそのの杜は家身ともの

支本

志いしともいそのの杜の紅葉ゆふ色ふ出てゆく人をとゆくれ 源朝臣

盤子里 安備村 井口井 日村ふあり

新勅

つとめ人ふいつ浩くんの口ゆ井のいそのの里は山吹のそれ 溪人令法

邂逅山金龍寺紫雲院 成合村の山腹ふあり 坂路八町 標石あり 天台律宗

本尊普賢菩薩 脇士 左 梵天王 右 帝釋天

開山堂 開山千親内供の彫像ふ安に慶長七年之月 豊臣秀頼公再興 三井寺に倣ふ 中奥宗像法師 抑千親内供ハ初ノ六角堂と成 頭密の法ふ学ひ宮寺の権豪ふ厭ひ山林ふ住ふ 又時々渡口ふ出て自馬 支と成 旅客の労を恵む性質慈順れ して面ふ嗔色なし 常ふ微笑ふ含む 世の人労ひ仰とす

邂逅池 本堂の西南ふあり 池中ふ弁財天社あり 能因歌枕云 桜咲国 玉葉

春風ふ今い氷も玉坂の池乃なりてもけく波をうり 家隆

支本

うゑ世ふい有へんとも海さかれけくんとふやひやいそる 和泉式部

紫雲塔 方丈の上 牛頭天王祠 表門の傍 鼇巌 坂路六丁相ふあり

能因櫻 捨樓の傍ふあり 能因法師像 捨樓の内ふ安に 池之坊旧跡 中門の傍ふあり

枝葉隠逸傳曰 寂一々能因 偶く惜春登り金龍寺山路 無人落華 不知歸日 皆鐘動時詠和歌人 至今誦之

彩古今寺イ

ふさやの春の夕くれさそふ入堂の撞ふ花散る 能因法師

それ金龍寺ハ 桓武帝延暦年中 泰澄の倍是雄卿の系創くそしめハ 安備寺と號を其ゆ百餘年ふ經く千親内供再営ゆ金龍寺ゆ 改めゆ人比内供ハ中納言橘公頼卿の二男相模守敏定の子ハ千親其面 寺ふ居しゆ人時北の方ふ尚ゆく紫雲たなびくこれと為く攀登り ゆ人ふ一つの小池あり其水金色ふ〳〵く殆雲も亦比池ゆ立出ふ池の

東小一宇の伽藍あり釋尊の像ハ安置して安隠寺と号し真小錫聲
向雲小和し清泉人世小非ざるの古寺なり為又ハ山のをかハ
足ゆへ小為の方遠く晴く日想観の便あれとも遠く南溟鯤
眺く故国二千里長江十二郎のをひをかハされ壺城めりそく池の
側小房ハむをんて居ハトゆひる今の池之坊ハ旧蹟又ハ池そう
龍女現出く法水を耳ト成仏をあれそう金龍寺と号く安和二年
天下旱の時　冷泉帝千観小勅して祈雨ありそれ忽膏雨降く
万民太平ハ祝小其後康保元年一宇を建く帝賢の像を安置に
内供ある時山椒の橋下一おりて橋ハ閑ゆひる小あ一の牽牛に
騎く鬢小絲かつ〻とりて結るゞ琴を上く奏ひる十悪五逆
謗方等極重最下の罪人も一度南無と唱ハ迎を引接さゞめて疑ひ
なしとそう是一ハ祝ふく加ハ消ゆう小矣小る内供ハ乃帝の
言葉を和所小ぞ涙じゆひる

おゆそろしゆ十悪五逆謗方等はゆあハ身小もはゆる罪小　千観
抑山椒の橋を天平年中僧正行基ハけ初ゆひそう勅ありて穿ハつ〻ハ
とハ人ども河の水滋漫して今の世ゆ小ハ橋下の宿のゝ絶小遺まそうハの
源信僧都ハ橋下の亞女小とひく被ハ志ばゝ内供ハ橋ハ閑く流ハ
落しゆへある時雲山小者涙小て指も足りそう秀谷法氷結ぐ筧の
水も者へ人山房寂寥そう〻人涙沸ありそれハかくぞ涙しゆへ
漢古
本国さうハんそうふさひし世のつゆ付者のみ西ハそひ袂をそれ　千観
法の身ハ月ハつ身をそゝ世ゆも無明の雲ハ見せぬそう　仝
ハ涙ハ勅撰の中小も入しゆへ初の邂逅の五りしう山歸とゆまそう永観元年
大呂十日寿齢六十六歳ゆく入寂しゆひ　已上元亨釈書及び寺記等の大意をもて に著に
麻茅原　金龍寺の禁小あり里諺云絵因法師ハ本ゆく笑女の死しうハ
足ゆひくかくぞ涙しゆへ
沙弥小ハ世ゆ小つゆ鬢さのふゆでたりそ袂のうへ小垂そん　絵因法師
と涙しゆへ人の屍動ハ出く茅むうう袂ハ濡ハ〻ハたくくゝ入りゆの
ぬし絶小ハ小茅を中の石ハ垂く手ひゆへと形んハ石今小あり

金龍寺
山家集
おほつかふ
いつれの山に
花ちらん
はるの
雲ちらむ
西行法師
表門
天王社

本堂
開山堂
方丈
佐岡橋
弁天
仏殿
僧ヶ隠

金竜寺山
松茸狩

茸狩
あるかとて
ねの中
千代

僧屋敷　金龍寺より六町許巽の方山にあり石垣の遺跡又敷石乃羽目　按るに此ひろ金龍寺の安滿寺か

同頃遊山記　奥をたづね山ぶかき松茸多く出る道灌あれに来りて

海の海上遠ふ見へ南の方晴てうらゝ沼花及び

神南備社　神南村にあり　延喜式名所集に同名大和国

神南備山丹波国　ふさたゝり神あひのりして送ふ人く

まうてゆきそふ別かしをけるふよの内

古今　人なるのあるゝ野くふたゝりとひていさゆあん　源実

宇治の南白有馬の湯に詣りる道ゝく

晴れ暮あゝとゝ行りけるふ

新勅撰　神あひの杜のあられに霜れ暮り秋もさそをまるゝん　權大納言長家

櫻井里　神内の東

秋風の吹ふ葉ゝ花をおりしゝ散くゝぬの里　実方

日

花を見ゝ春のゝ花の名残とて木の葉ゝほく櫻井の里　為家

櫻井　櫻井里

ふあり

花ちるゝゝ春ゝ入れゝ櫻井の名ふ名ゝ残ゝ入れ　和家

待宵小侍従墓　櫻井村の山ふあり小侍従の石塔水別當光清の女なり

近衛院の皇后多子に仕へ和歌を善に

櫻井として名ふ待宵小侍従と同一人の

旧跡をたつぬるゝく

今もあるかあらゝ昔の待宵もふけり侍の名ふ聞ゝく　羅山子

碑銘曰

待宵小侍従者姓紀氏武内宿禰苗裔石清水別當光清女也仕近衛皇后多子大寺左大將藤原兼

実定自福原歸洛一夕請皇后見月時小侍従陪侍翌朝歸福原使藏人傳詔因示侍従倭歌小侍従

倭歌嘗有待宵開鐘之語故稱曰待宵小侍従其所詠歌多載在歷代勅撰可謂閨秀也俗傳攝州高槻城畔一里許有

其古跡聊記之以為證焉

慶安三年春三月日　日向守大江姓永井氏直清置

櫻井宿　可攝泉三州太守贈正二位右近衛中將橘朝臣諸兄と云人

天下ふ攝ひ勇名四海に動く　碑文羅山集出

天平年中天満地の神と崇奉る安邦定國の謀臣武威

延元元年五月　一鬼神不測の勢を鬼むれ朝無双の英雄

兵庫へ向ふ　義正行と共櫻井宿ゝく

云関せ遺訓かしゝく親子別ゆく訓ゝ

帝の命ふりて足利の討ふらして足非ゝく

逆賊討死の事ふ

尊氏真義大軍を率して九州より上洛の間要害の地に於て防た戦うを為に兵庫に引退ける中義貞郎従早馬を進て内裏へ奏聞ありければ主上大に御驚有て楠判官正成を召れて急き兵庫へ赴下り義貞に力を合せて合戦を致すべしと仰られ正成畏て奏しけるは尊氏已に筑紫九国の勢を率して上洛致し候なれば定て勢は雲霞の如くに成候らん御方の疲る小勢を以て敵の横に奈こる大勢に急合て戦を致し候て御方決定打負候はと覚へ候れば新田殿は只京都へ召れ入て防ぎ給へ山門へ臨幸あり候へし正成も此内へ馳下り候て畿内の勢を以て河尻を塞だ両方より京都を攻て兵粮を断つ候はゝ敵は定て敗北に成て敵に次第に疲て落下り御方に見て随て馳集り候へし其時に出て新田殿は山門より推寄られ正成は搦手より攻上り候て朝敵を一戦に滅し宰堂中に立て覚候新田殿も

定て此料簡候得共路次遠く一軍もせずして無下に云甲斐なく人の思ひ給ん所を恥て兵庫へ引退られ候て覚候合戦は兎も角も始終の勝を肝要と候へ能々遠慮を回らし公議を定られ候て誠に軍議の事は兵庫へ赴て諸卿会議有て御方に重て城門宰相清忠申されける正成が申所も其謂有と雖も征罰の為に差下される節度使未戦を成ざる前に帝都を捨て一年の内に二度迄山門へ臨幸あり事は帝位の軽に似て官軍の道を失ふ歟縦令尊氏籠紫勢を率して上洛を成ても去年東八箇国を順へて上りし時の勢に比べ過て凡戦の始より敵軍敗北の時に至る迄御方小勢なれども毎度大敵を責靡ぎ給へし是全武略に勝る所に非ず只聖運の天に叶る故に戦ども只戦に帝都の外に決して敵を鉄鉢の下に滅さん事のみ細に成べたるれば只

時に成昏に補任下ゆべしと仰出されるに正成は上いさのゝ異儀を
申に及ばぬそ延元元年五月十六日に都を立て五百餘騎にて兵庫
へ下る正成是を最期の合戦と思ひ定れば嫡子正行が今年
十一歳にて供しけるを成思ひの様有とて楠井の宿より河内へ
返し遣をやそ庭訓を遺しける御子子成奉て二月成経る付教
千丈の石壁なりとも擲其子獅子の機分あるべし教さるに宙より
駆返りて死する事成得じといふ況や汝已に十歳に餘りぬ一言
耳に留らば我教誡に違事かれ今度の合戦天下の安否や
そ間今生に汝が顔を見ん事是を限りと云て正成已に討死
せしと聞あば天下に必足利尊氏の代に成ぬと心得べし然ばとゝくども
一旦の身命を助らんに為に多年の忠烈を喪ふ事浅人に出ぬ事なる
べしと一族若黨の一人も死殘るべき程に金剛山の邊より引
籠て故寄来て命を養由が矢石に無く義を紀信が忠に

比べ是を汝が第一の孝行なりと泣々や合先て各東
西へ別れぬ昔の百里奚は穆公晋の国を伐し時戦の利無らん事成
鑒て真將孟明視に向て今を限の別を悲む今の楠判官は敬軍都の
西に逆付て闔しく国必滅ん事成愁て其子正行を留て無跡
を絶の義を進む彼は異国の良臣是は吾朝の忠臣時千載を隔ても
いくども前聖後聖一揆なく有難かりし賢佐也 下畧

極子に付て仕るべきや楠の 楊

阪口八幡祠 楠井村にあり楠正成子息正行に別て蜀水の旗をたて戰ひ
しとき又同村の山に寶城菴とて御祈願ありてみな正成
の画軍器 旗等あり

水垂瀬山 楠井の東にあり類聚国史に水成に倣る延喜年中
新撰姓氏録に和泉国遊猟しかく半日本後紀に見えたり 後八千

成垂瀬山夕かけ茶の下露や秋なく虫の涙なるらん 後久敬人歌人百

水生山王をみたしるる光てをれぬ里と月やをむらん 後人名氏 後白河院二条

夫木

みかの原山むらしの花は色なるらんの月は今は春のをなるる

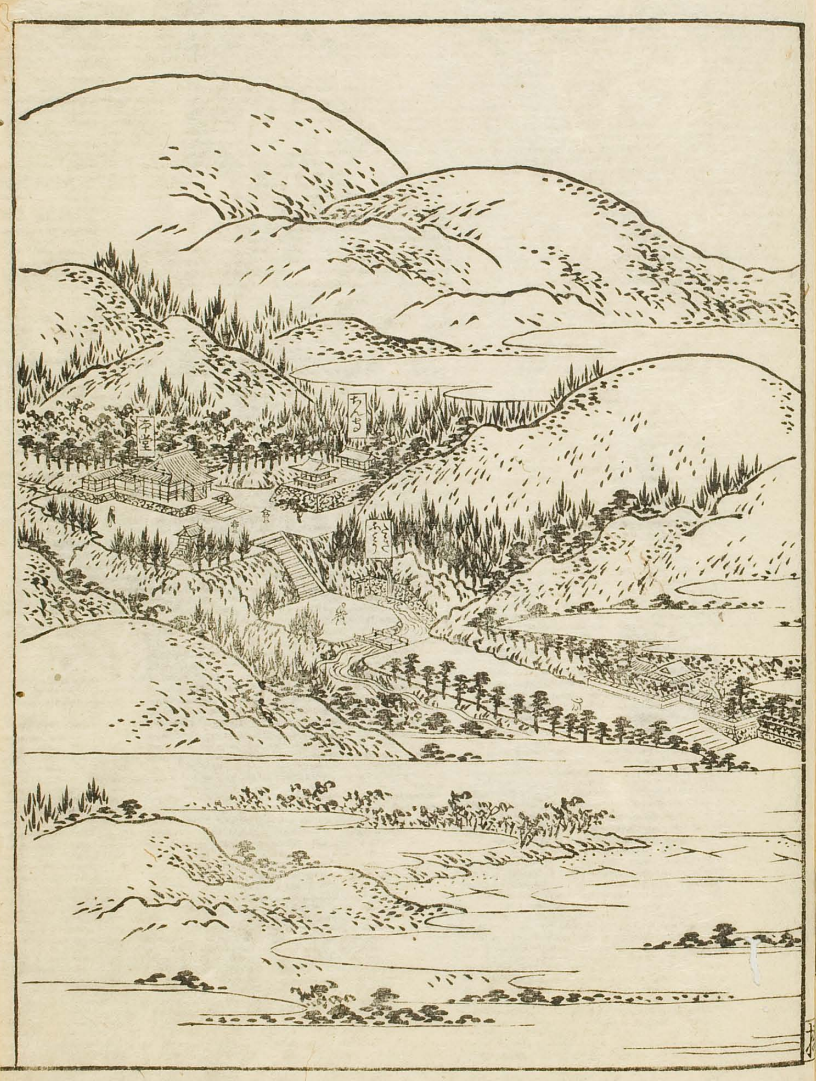
待宵小侍従墳

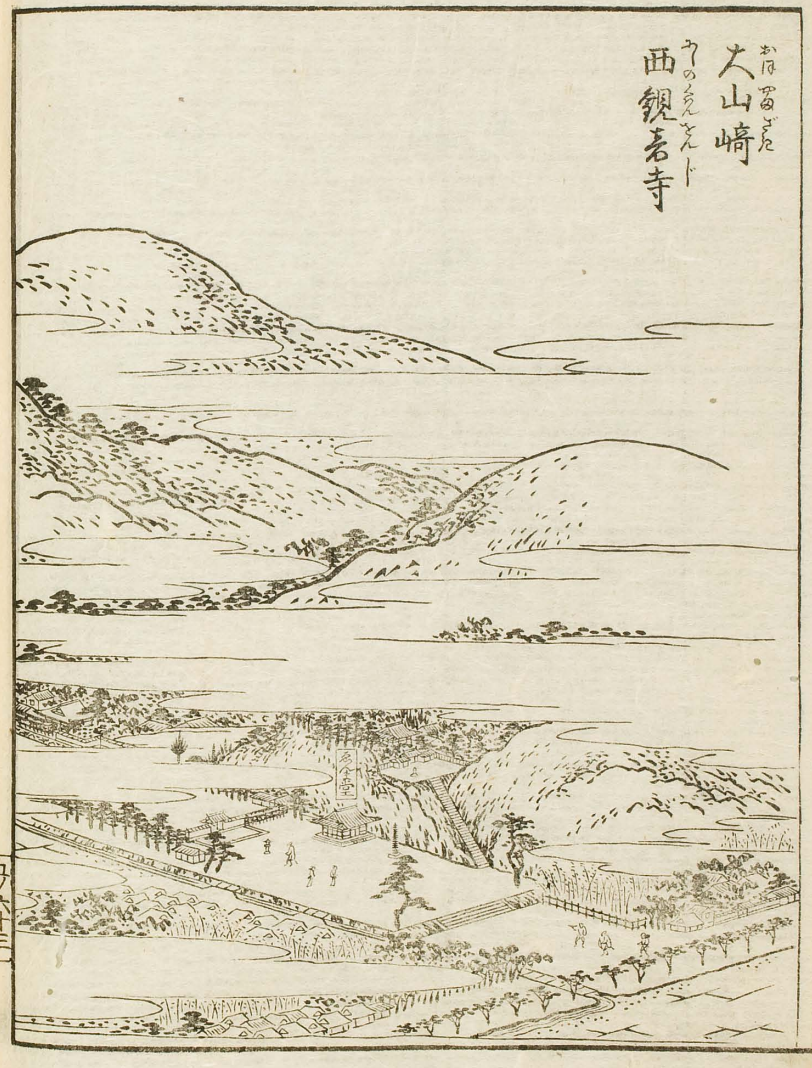
待宵の
ふけりゆくの
鐘きけば
ひるるのこれ
あるらゝ
をめく

小侍従

あうこと
君ゝ
いひそん
春の
花
けさも
あだ
悲
ひゆん

藏人




大山崎
西観音寺

水垂瀬瀧　水垂瀬山の山麓ふあり

壬二　み垂瀬山せたいまし滝の秋の月たのひ出るも消ん今うら　家隆

み垂瀬川　摂津村ふあり むかしは関戸院公山城橋津の界ありしを今は山川を城橋の境とし水源尺代村一の瀬より流れ水無瀬殿とあり摂津を経て淀川ふ入

百素　うゝふれく老いおのゝしみかせ川有てもみはりてふ越ぬ　漢人おもひ

古今　水垂瀬川ありて切水のくいを結ふ川を絶ぬとおもへ共

千載　人おもひのをこのまて水垂瀬川せたのたくなる杉果ぬらん　月

新古　尺てせそ山なかをむみ垂瀬川夕ハ秋とおのりひくん　基家卿

新勅　深かゝ水垂瀬の河ぬ底ハ下の恋ふ年ふりぬるも　太上天皇

み垂瀬殿口　山州橋本の宿より摂津へ淀川の　斎宮親王母

支本　若をつまと交野の里にすみ垂く貧取みかせのつゝ志つん　憲盛

水無瀬里　摂津村の四号

後拾　ふと爲て月ハしも昔ふ成ふゝり里ハみかせの秋の松ハ月　俊親

支本　とや立ぬせ行うの波とゝゆるふみかせの里ふ咲る卯の花　漢人おもひ

水無瀬殿　摂津村ふあり 羽林家 源氏 舊山 新山 文徳帝 第四皇子 惟仁親王 清和天皇 惟喬親王 故宮の遺蹟 忠仁公の外 惟喬親王 仲恭天皇 東宮 若宮 惟喬親王 仲恭天皇 水垂瀬宮ふ出棲 したまふ

山や川や老の涙人への為水垂瀬殿　摂政

後鳥羽院御廟　水無瀬殿ふあり 後鳥羽院遷幸の所ゝて水垂瀬の 離宮と称ス

引極ー里ハ人ハ歩の庭のかぬ為ぬ色ふ老や色ぬゝん　後鳥羽院御製

十月をゝり水垂瀬ふ行ゝしに若大僧正慈恵のゝく

ぬれく時雨のゝとやはゝゝく次のをゝれ垂神月

垂常の秋あゝとゝみてつゝらし行ゝし神

新古　おをひ出るおゝく笑の夕烟むをふ塔ーをを見ゝてみふ　太上天皇

足ー

ゝひ出るおゝく笑ゝ蘭のゝふゝゝれ志ゝ見ぬ夕煙の形　若大僧正慈恵

百練抄曰建保五年正月十日水垂瀬の新宮ふ移御を

東鑑曰建久九年正月十一日御脱屣業久三年七月鳥羽院ふ遷御

ーゝ同ゝ八日御御出落ー同十三日隠岐國ー遷御ーゝ延應

元年二月廿二日崩御六十。五月廿五日顕徳院と追号ー奉る仁治

三年七月八日顕徳院と改る　後白河院と称し奉る　太上天皇と号に云云　建暦元年　帝隠岐の嶋に移る　後土御門帝　崇徳宮の
御墓ふるく　瑞宮と構に明應三年八月廿三日　詔ありて　隠岐嶋へ使
中納言藤原敦圖卿　左近衛少将藤原清継卿　隠岐嶋へ使
しくそれを迎奉り其後世祠堂に納言為原　業成卿　として　奉祀ふ使し
業成の後世祠堂に納言為原　業成卿　として　奉祀ふ使し

阿弥陀院

水無瀬山本の系図　菩提寺　法土宗

本尊阿弥陀佛　行基作　長八尺　観音堂　本尊十一面観音　恵心僧都の作
脇士　将軍地蔵　勝軍毘沙門

廣瀬神祠

廣瀬村にあり　西八王子と称に廣瀬神門　東大寺　栗井等の四村の
生土神　又小鳥祠　二所あり　一所は上の宮　一所は下の宮　と
山城の西にあり　惡魔尾山信貴谷　と
天台宗

西観音寺

御墨

水無瀬山本の系図　菩提寺　法土宗

本尊十一面千手観音　倫像　檀金像　長さ八分　脇士　不動　右毘沙門
倫山にあり　三つの谷あり　所謂　大谷　中谷　閼伽谷　谷
観音と称に　鎮守　天照皇神　八幡宮　春日　山王大宮
八王子　系図
倫魔堂　寺の入口にあり　小堂　堂内　倫魔王及十王の像
倫　一日本三所に安置に所謂　当一は　紀中　中世郷
当二は　当山当三は　紀伊
古集　郡あり
支氏　観音寺　四地　南の山間　あり　くむり　聖武帝　天平

十八年大僧正行基　勅をうけて建創し本尊は御の帝の御念持仏之
厨后役小角苦修錬行し天下の名嶽霊窟に分入り　数に年を
一日ごとに巡りしく高嶺に登り石上に坐し　咒術をもちく閼伽
法の今の閼伽谷これ　其流瀑々とし堂前の流とかるあくに
石像の不動明王安置又山頂に弁財天祠あり　これも役行者の勧請と
なる　嶺の修験大師もこゝに入て練行し　後白河上皇も水無瀬
ゝこゝに駕をめぐらし本尊大然を尊信しまつる　已上　寺記
関明神祠　大山祇　雄宮八幡宮の西にあり　足城摂二州の鎮
関戸院舊蹟　関明神の西町の中にあり
故関の跡今不詳
原公貞の大隅へまゐり　ゆきくるふせんやの流に月の
あり　ゆくるくるあまおしこ　作
拾遺
ちるもある藤の花ふもとをこれ　秋の浦山にを秋のよ乃月　正東盛
新古
系図　やはらかに　を　毎月　と　の　を　大江嘉言
支氏大山祇の驛路に京師九条東寺の西四つ家　羅城門の旧地　西南に後

桂川を渡り世橋を渉り向町を過ぎて山崎に向ひ城攝の境関戸院の旧跡に至る是関西二十三州の官道なり文禄年中豊臣秀吉公朝鮮征伐の時開く所故に唐海道と云ふ古い羅城門より南へ官道あり久我縄手淀の大渡り公儀より山崎橋を造り関戸院に至る南に芥川宿あり今の郡山瀬川昆陽より西宮兵庫須磨明石浦に至る南に芥川宿あり今の郡山瀬川昆陽より西宮兵庫須磨明石浦に至る

周禮曰凡て郊野の道十里に廬あり廬に飲食あり二十里に宿あり宿に路室あり左傳曰楚子乗驛に乗り驛に驛馬と則馬逆の制已に周に見へたりと云ふ

あるこの制を護く往還の旅人を安めしむる官道と云ふ

深のそひたちはしへのきのんとそすんりけるはす
ふさたあくつれおーまろのあよてとろ

古今

いのちたに心にかなふ人なくは何か別のかなしからまし　在原業平